仙台市文化財調査報告書第195集

仙台平野の遺跡群XIV

――平成6年度発掘調査報告書――
燕沢遺跡第8次調査など

1995年3月

仙台市教育委員会

仙台市文化財調査報告書第195集

仙台平野の遺跡群XIV

――平成6年度発掘調査報告書――
燕沢遺跡第8次調査など

1995年3月

仙台市教育委員会

序　　文

国庫補助事業として「仙台平野の遺跡群」発掘調査に着手したのは昭和56年度でした。この事業も数えて14年目を迎え、これまで陸奥国分寺跡、国分尼寺跡の国指定史跡の範囲確認調査や郡山遺跡、富沢遺跡などの個人住宅建築に伴う小規模調査を行ってまいりました。今年度は、燕沢遺跡の範囲の確認調査ならびに性格究明のための発掘調査、および、郡山遺跡の個人住宅建築に伴う発掘調査を実施しました。本書はそれらの調査成果をまとめたものであります。

当市は平成元年４月に政令指定都市となり、都市整備の充実が急務となってきております。こうした中で、道路整備に関わる総合交通体系の整備事業や区画整理事業を基盤とした町づくりが進められています。一方、民間の小規模開発も増加し、発掘調査件数も漸次増加する傾向にあります。

当市教育委員会では、先人の創造した歴史と文化遺産を次の世代に継承し、生活の中での活用を図っていかなければならない責務を負っています。しかし、こうした文化財の保護活用は、市民の方々の御支援があってこそ、はじめて成果をあげられるものと思います。

今後とも広い視野にたって充実した遺跡保護を行っていくために、精一杯努力してまいる所存でありますので、さらなる御指導、御支援を切にお願い申し上げ、刊行のご挨拶と致します。

平成７年３月

仙台市教育委員会

教育長　坪　山　　繁

例　　言

1．本書は平成6年度国庫補助事業である緊急遺跡範囲確認事業に伴う「仙台平野の遺跡群」の発掘調査報告書である。

2．本書の土色については「新版標準土色帖」（小山・佐原：1973）を使用した。

3．実測図中の水糸高は標高である。

4．実測図、本文中の方位は真北を基準としてある。仙台においては、磁北は真北に対して西偏約7°20′である。

5．本文執筆は、長島榮一　Ⅰ、Ⅱ［1］2、3、4・A区、5(1)･(4)、Ⅱ［2］、熊谷裕行　Ⅱ［1］1、4・B区、5(2)・(3)が行い、編集は、長島・熊谷がこれにあたった。

6．遺構略号は次の通りとした。

ＳＡ　柱列　　ＳＢ　建物跡　　ＳＤ　溝跡・溝状遺構

ＳＩ　住居跡　　ＳＫ　土坑　　ＳＸ　性格不明遺構

7．本書中に掲載した発掘調査で出土した遺物及び遺構・遺物の実測図は、全て仙台市教育委員会が保管している。

8．今年度事業は平成6年4月に着手し、平成7年3月に終了した。

本　文　目　次

序　　文
例　　言

Ⅰ　調査計画と実績……1
Ⅱ　発掘調査報告

［1］燕沢遺跡
1．位置と環境……2
2．研究史……6
3．調査経過……9
4．発見遺構と出土遺物……9
5．まとめ……30
写真図版

［2］郡山遺跡
1．位置と環境……49
2．調査概要……49
第105次調査

Ⅰ　調査計画と実績

仙台市は昭和62年宮城町、昭和63年泉市、秋保町と合併し、明治22年の市制施行以来100周年の年に全国11番目の政令指定都市に移行した。さらに地下鉄の延長や仙台空港の国際化、高速道路網の充実などによって著しい都市化が進む状況になってきている。旧仙台市域では辛うじて残っていた農地も急速に宅地となりつつある。

仙台市内の遺跡（埋蔵文化財包蔵地）は700箇所に達するが、日々変化する社会の中でこのまま将来に残し、伝えていくのは困難なように思える。しかし開発に対応した発掘調査だけでなく、事前に遺跡の範囲と性格究明を目的とした調査や個人住宅建設などの小規模な開発に対応した調査を実施していくことによって、今後の遺跡保護や街づくりに活かす事が重要と考えられる。したがって当市教育委員会では昭和56年度より国の補助を受けて「仙台平野の遺跡群」の発掘調査を実施してきた。今年度は昨年度に引き続き燕沢遺跡と郡山遺跡の２遺跡で、以下のとおり発掘調査を実施した。

１．目　　的　仙台平野に分布する遺跡群の範囲確認、性格究明のための発掘調査

２．調査面積　440㎡

３．調査期間　平成６年６月～12月

４．調査体制

調査主体　仙台市教育委員会

調査担当　仙台市教育委員会文化財課

課長　白鳥良一

調査第一係　係長　田中　則和　　主査　木村　浩二　　主事　長島　榮一

教諭　熊谷　裕行

管理係　　係長　千葉　晴洋　　主任　村上　道子　　主事　福井　健司

主事　齋藤　英治

調 査 実 績 表

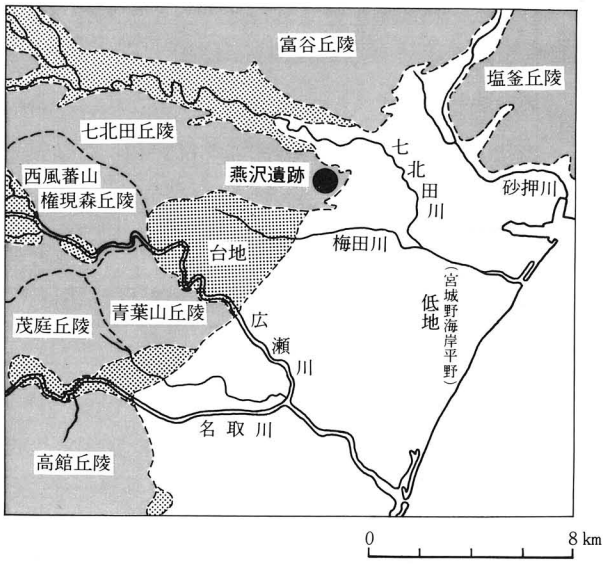
調査地	所在地	申請者	調査事由	対象面積	調査面積	調査期間
郡山遺跡	太白区郡山 三丁目３－４	太白区郡山三丁目24－15 庄　子　都代子	共同住宅建築	40㎡	40㎡	平成６年10月３日 ～10月31日
燕沢遺跡	宮城野区燕沢東 三丁目179他	仙台市教育委員会 教育長　坪　山　　繁	範囲確認	400㎡	400㎡	平成６年11月４日 ～12月27日

II　発掘調査報告

［1］燕沢遺跡　―第8次調査―

1．位置と環境

燕沢遺跡は、仙台市宮城野区燕沢東3丁目・鶴ケ谷東2丁目に所在し、JR東仙台駅の北東約2kmの地点に位置している。範囲は東西約0.4km、南北0.3km、面積約1.2㎢である。遺跡は段丘上のわずかな平坦面から周辺の緩斜面域に広がっているという特徴がある。この丘陵は奥羽山脈から派生し、仙台市の北端を区画するように東に延びており、富谷・七北田丘陵（仙台市北部については「台原・小田原丘陵」と呼称される。）と呼ばれている。この間を七北田川が東流しながら開削し、平野部において梅田川と合流して太平洋に注いでいる。七北田川は上・中流域には河岸段丘を、また両岸に自然堤防・後背湿地を発達させながら、丘陵端から太平洋へ向けて広大な宮城野海岸平野の北部を作り上げている。



第1図　仙台地域周辺の地形区分
（地質調査所：1986を加筆・修正）

本遺跡は、この台原・小田原丘陵の東端部、七北田川右岸の標高20～30m程の河岸段丘上に立地し、沖積地との比高差は10～20m程ある。

遺跡の周辺では、年々宅地化が進み、本遺跡にも及んできている。また、丘陵東端部の一部は国道工事に伴って削平され、旧地形をとどめない箇所もある。しかし周辺遺跡の調査によって、少しずつではあるがこの地域の歴史的景観が知られつつある。以下、燕沢遺跡と周辺の歴史的景観を概観する。

燕沢遺跡周辺では、古墳時代より遡る時代の遺跡はほとんど発見されていない。わずかに縄文時代・弥生時代の遺物の散布地が知られるのみで、これまでのところ遺構の存在については不明な点が多い。しかし古墳時代以後の遺構や遺物は、数多く発見されている。

燕沢遺跡の北東、七北田川右岸の自然堤防上には鴻ノ巣遺跡がある。対岸の自然堤防上には新田遺跡、隣接して山王遺跡がある。鴻ノ巣遺跡では、古墳時代中期の竪穴住居跡が検出され、

南小泉式の土器とともに石製模造品、紡錘車、砥石などが出土している。なおこの時期の住居としては、カマドを有する点で先進的である(註１)。新田遺跡からは、古墳時代中期の土師器とともに石製模造品が出土している(註２)。また、山王遺跡からは竪穴住居跡が検出され、石製模造品やその未製品をはじめ多量の遺物が出土している(註３)。本遺跡でも古墳時代前期の竪穴住居跡が確認されており(註４)、周辺地域を含め古墳時代の早い時期から集落が営まれていたものと考えられる。また丘陵や段丘上には、千人塚古墳（円墳)、糖塚古墳（円墳)、五郎兵衛古墳（円墳）などの高塚古墳が造営される。これらは集落の発展を基盤としてこの地に造営されたものと考えられ、集落の発展を支えた生産基盤が存在することも推測される。近年の鴻ノ巣遺跡の調査では、古墳時代中期とみられる水田跡が検出されている(註５)。七北田川右岸の後背湿地にも、古墳時代の水田跡が埋没している可能性が考えられ、今後の調査に期待される。さらに本遺跡の南西約２kmには東北地方最古の大蓮寺窯跡があり、初期須恵器の生産が行われている。

このようにみてくると古墳時代の中期頃までは、七北田川両岸の自然堤防上では集落が営まれ水田耕作による生産活動を行い、丘陵上や裾部には在地有力者のものと思われる高塚古墳が造営される。また、東北地方でいち早く須恵器生産が行われるなど、すでに畿内政権より影響を受けていた地域とみられる。

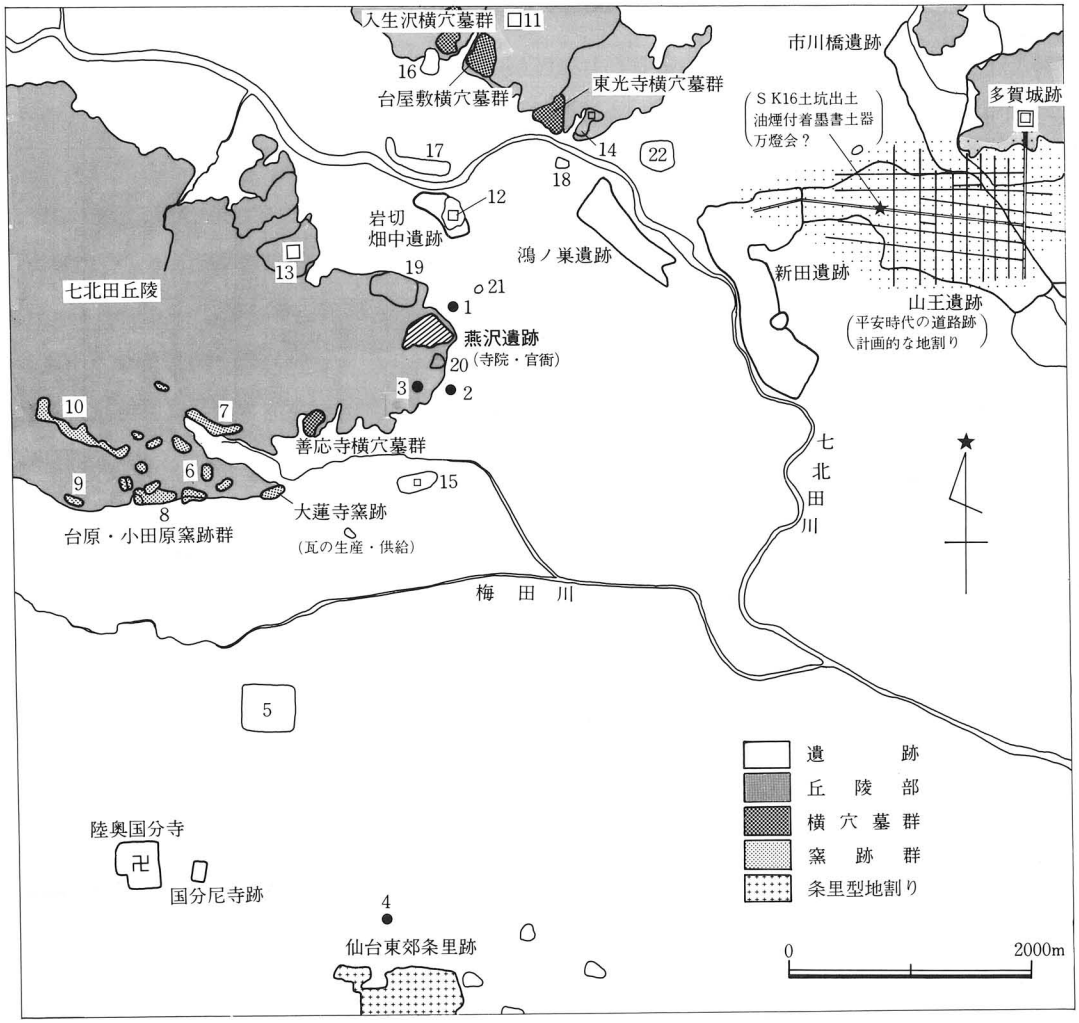
古墳時代後期からは新たな変化がみられる。近年の調査で、郡山遺跡や名生館遺跡において多賀城創建より遡る７世紀後半頃の官衙跡が確認され、仙台周辺はもとより北の大崎地方まで律令国家に取り込まれようとしていたことが知られる。この地域もその中に取り込まれていたのは確実であろう。本遺跡は戦前から古瓦が発見されていることで注目され、官衙あるいは寺院として論じられてきているが、まだその結論は明らかにされていない。(これまでの論考については「２．研究史」で詳述する。)

古墳時代の終りの７世紀末から大蓮寺窯跡では瓦の生産が開始されている。近年の調査によって、ロクロ挽き重弧文軒平瓦や単弁蓮華文軒丸瓦の存在から、多賀城創建より遡る窯跡であり、本遺跡がその供給先として指摘されている(註６)。本遺跡では今のところ、それに対応する遺構の存在は確認されていないため、瓦の供給関係については不明な点が多い。また、これまでの高塚古墳から横穴墓へと墓制が変化をみせるのもこの時期である。本遺跡の南西1.25kmほどには善応寺横穴墓群がある。古墳時代後期から奈良時代以降まで存続するが、なかには７世紀まで遡るものも確認されており(註７)、本遺跡との関係も含めて注目される。七北田川左岸の丘陵端部にも東光寺、入生沢、台屋敷などの横穴墓が造営され、総計で100基を越えるものと推定されている。このように、この地域の７世紀から８世紀初めにかけての景観を復元するためには本遺跡におけるこの時期の遺構の検出が不可欠であり、今後の調査に期待される。

奈良時代以降、台原・小田原丘陵は、県内有数の古代窯業地帯として活況を呈する。本遺跡の東北東約5.25kmには陸奥国府多賀城が造営され、その付属寺院である多賀城廃寺が建立される。多賀城創建期の瓦窯跡は、県北の大崎地方にある木戸窯跡群(田尻町)、日の出山窯跡群(色麻町)、大吉山窯跡群（古川市）などであるが、第II期の瓦窯跡は、この台原・小田原瓦窯跡群に集中している。創建期の瓦が県北地方で制作されたことは、大崎地方における律令体制の成立を示すものである。また、第II期の窯跡群の移動は、陸奥国分寺の建立を契機としたものであるという指摘もある（註８）。以後、多賀城が廃絶する10世紀中頃まで、台原・小田原瓦窯跡群は陸奥国官窯として機能している。多賀城周辺には新田遺跡、山王遺跡、市川橋遺跡、高崎遺跡などがあり、多くの遺構や遺物が発見されている。中でも平安時代の道路跡が検出されていることから、多賀城周辺の計画的な地割りの存在が考えられている(註９)。七北田川右岸の岩切畑中遺跡では、奈良・平安時代の竪穴住居跡などが発見されている（註10)。本遺跡でも、これまでの調査で平安時代の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されている。これらの遺構の配置には規則性が認められ、漆紙文書や墨書土器が発見されていることから、寺院跡か官衙跡と考えられている(註11)。この時期の生産遺跡の調査例は多くないが、市川橋遺跡で平安時代の水田跡が検出され、その畦畔はほぼ正方位を示している（註12)。七北田川周辺の岩切・田子・余目地区の後背湿地には条里型の土地割りがみられるが、これは中世以降のものと考えられている(註13)。しかし、調査例が少ないことや中世の開発が古代の土地割りを基本としている可能性も考えられることから、発掘調査によって埋没条里を確認することが望まれている。このように本遺跡の性格はまだ不明瞭な点もあるが、国府多賀城創建以降、この地域周辺には計画的な国家施設やそれに伴う村落、生産域、墓域などが存在していたと考えられる。本遺跡は、国府多賀城や付属寺院、陸奥国分寺・国分尼寺など四方を見渡せる高台にある。ここから見る風景は、往時の人々の目にはどのように映ったのであろうか。

10世紀中頃に多賀城は廃絶したものと考えられている（註14)。この時期の政治的・社会的な背景は今のところ明らかではないが、律令制度が大きく変質し衰退し始めたことは確かである。この頃から11世紀にかけて武士が出現し、陸奥国の在庁官人となり、後に在地の領主になっていくものも現れたようである。文治５年（1189年）の奥州合戦を経て、12世紀末の鎌倉幕府の成立により、陸奥国もその指揮統制下におかれることになった。この時に陸奥国留守職として、新しく任命されたのが伊沢家景である。家景はのちに留守を名字とするようになり、その子孫は本遺跡の北2.5kmにある岩切城を居城としている（註15)。本遺跡の周辺には、若宮前遺跡、稲荷館跡、笹森城跡、小鶴城跡など、中世の館跡が知られている。また、留守氏の菩提寺である東光寺には、石窟仏群や板碑群などがある。留守文書によると冠川（現七北田川）には今市橋が架けられており、冠屋市場、河原宿五日市場、在家などの地名がみられ、商業活動が行わ

れていたことを窺わせる。中世の多賀国府の所在地はまだ明らかではないが、岩切地区が当時、政治・経済・文化の一大中心地であったことが考えられる。また、本遺跡周辺にも前述のとおりいくつかの館跡が存在しており、中世における要衝の地であったと思われる。



No.	遺跡名	種別	立地	時代	No.	遺跡名	種別	立地	時代
1	千人塚古墳	円墳	丘陵斜面	古墳	12	稲荷館跡	城館	自然堤防	中世
2	糖塚古墳	円墳	段丘	古墳（中～後）	13	笹森城跡	城館	丘陵	中世
3	五郎兵衛古墳	円墳	丘陵	古墳（後）	14	若宮前遺跡	城館・散布地	丘陵斜面	縄文・古墳・平安～近世
4	曽利松明神古墳	円墳（？）	沖積平野	古墳	15	小鶴城跡	城館	丘陵	中世
5	南目城跡	城館	沖積平野	中世	16	入生沢遺跡	散布地	丘陵麓	平安
6	安養寺下窯跡	窯跡	丘陵斜面	奈良	17	大正囲遺跡	散布地	自然堤防	平安
7	安養寺中囲窯跡	窯跡	丘陵斜面	平安	18	今市遺跡	散布地	自然堤防	平安・中世
8	神明社窯跡	窯跡	丘陵斜面	平安	19	菖蒲沢遺跡	散布地	丘陵	縄文・奈良・平安
9	庚申前窯跡	窯跡	丘陵斜面	奈良	20	吉沢遺跡	散布地	丘陵	平安
10	与兵衛沼窯跡	窯跡	丘陵斜面	平安	21	山崎囲遺跡	散布地	丘陵	縄文
11	岩切城跡	城館	丘陵	中世	22	洞ノ口遺跡	散布地	自然堤防	平安

第２図　周辺の遺跡

2．研究史

燕沢遺跡の中でこれまで実施された発掘調査については、「仙台平野の遺跡群XIII」の第７次調査の報告の中にその概要をあげておいた。ここではそれ以外の燕沢遺跡を取り上げた論考について、一部に仙台市教育委員会の報告も含まれるがそれらの成果を整理しておきたい。

燕沢遺跡を初めて取り上げたのは石田茂作である。昭和９年（1934）に岩波講座『日本歴史』の「仏教の初期文化」の中で、文献資料には記載されていないが奈良時代に製作された瓦を出土する遺跡のうち位置・地勢・字名等の地理的な観点からも検討を加え、「寺院」と言えるものとして全国で171箇所をあげている。宮城県内では「燕澤寺　広原廃寺」の２箇所を記述している。古瓦の出土が重要視された結果と考えられる。

伊東信雄は、昭和25年（1950）に『仙台市史３　別編１』の「三　燕澤古瓦出土地」では、土師器の坏が数十個重なって出土することや２種類の軒丸瓦が出土することを紹介したうえで、多賀城関連の施設の可能性を想定している。

内藤政恒は、昭和37年（1962）～昭和40年（1965）にかけて『歴史考古』９～13号に「仙台市台ノ原・小田原瓦窯跡群と出土の古瓦（Ⅰ）～(Ⅳ)」を掲載している。とくに第12号の「仙台市台ノ原・小田原瓦窯跡群と出土の古瓦(Ⅲ)」において小田原案内の瓦窯跡（現　大蓮寺窯跡）から出土した瓦のうち、平瓦と重弧文軒平瓦は燕沢遺跡から発見された瓦と同じ特徴があるとして、燕沢遺跡への供給を指摘している。さらに第13号の「仙台市台ノ原・小田原瓦窯跡群と出土の古瓦(Ⅳ)」では、台原・小田原瓦窯跡の中の各地点からの供給先を総括する中で、多賀城、陸奥国分寺、燕沢遺跡をあげている。ただし燕沢遺跡の性格については明確に述べていない。

この『歴史考古』第13号には工藤雅樹の「陸奥国分寺出土の宝相花文鐙瓦の製作年代について―東北地方における新羅系古瓦の出現―」という論文がある。そこでは陸奥国分寺跡から発掘された宝相華文軒丸瓦を検討する中で、燕沢遺跡からも宝相華文軒丸瓦が出土することを指摘している。多賀城跡や胆沢城跡の発掘成果と文献資料の検討から、これらの宝相華文軒丸瓦が貞観11年（869）の大地震復興のために、陸奥国修理府に派遣された新羅人により製作された瓦と推定している。宝相華文軒丸瓦の年代観については、その後の多賀城跡の発掘調査でも踏襲され、現在に至っている。

内藤政恒が所蔵していた瓦が昭和49年（1974）に「東北古瓦図録」として出版された。燕沢遺跡の瓦としては軒丸瓦（歯車文、重弁蓮華文、細弁蓮華文、宝相華文）７点、軒平瓦（均整唐草文）４点を掲載している。このうち特に注目されるのは均整唐草文軒丸瓦で、きわめて流麗な文様が浮き彫り的に表現され多賀城跡や陸奥国分寺跡では出土していない(註16)。また昭和57年（1982）に東北大学文学部から「東北大学文学部考古学資料図録」が出され、第２巻に

燕沢遺跡出土の瓦として軒丸瓦（歯車文、重弁蓮華文、宝相華文）３点、軒平瓦（唐草文）１点を掲載している。しかしこれらの瓦は他の資料に既に掲載されているもので、歯車文軒丸瓦と唐草文軒平瓦は『東北古瓦図録』、重弁蓮華文軒丸瓦は『仙台市史３　別編１』、宝相華文軒丸瓦は『歴史考古』第13号の工藤雅樹の論文で扱ったものと同一の個体とみられる。

仙台市教育委員会による発掘調査が実施されるようになると（註17）、渡辺泰伸は昭和58年（1983）に東北学院大学東北文化研究所紀要14号の「多賀城創建以前の瓦生産とその供給地の様相―仙台市大蓮寺瓦窯跡を中心として―」の中で、燕沢遺跡第１次調査出土の瓦と大蓮寺窯跡出土の瓦の比較検討を行っている。さらに平成２年（1990）には『伊東信雄先生追悼考古学古代史論攷』の「瓦生産の諸段階―古代東北地方における瓦生産導入期―」の中で、燕沢遺跡第１次、第２次調査の成果から、遺跡は官衙的な性格を強く感じさせるとしている。また平瓦については大蓮寺窯跡で生産された瓦の供給先であることが確実となったと述べている。

当市教育委員会では、燕沢遺跡で表採された単弁蓮華文軒丸瓦を昭和62年（1987）に「年報８」に掲載し、特徴から多賀城創建以前か創建期の年代をあたえている。これについて辻秀人は平成４年（1992）に『福島県立博物館紀要』第６号の「陸奥の古瓦の系譜」で、燕沢遺跡出土の単弁四弁蓮華文軒丸瓦は上総の大椎廃寺、九十九坊廃寺出土の単弁蓮華文軒丸瓦と一致する文様と考え、７世紀末葉から８世紀はじめの年代をあたえている。

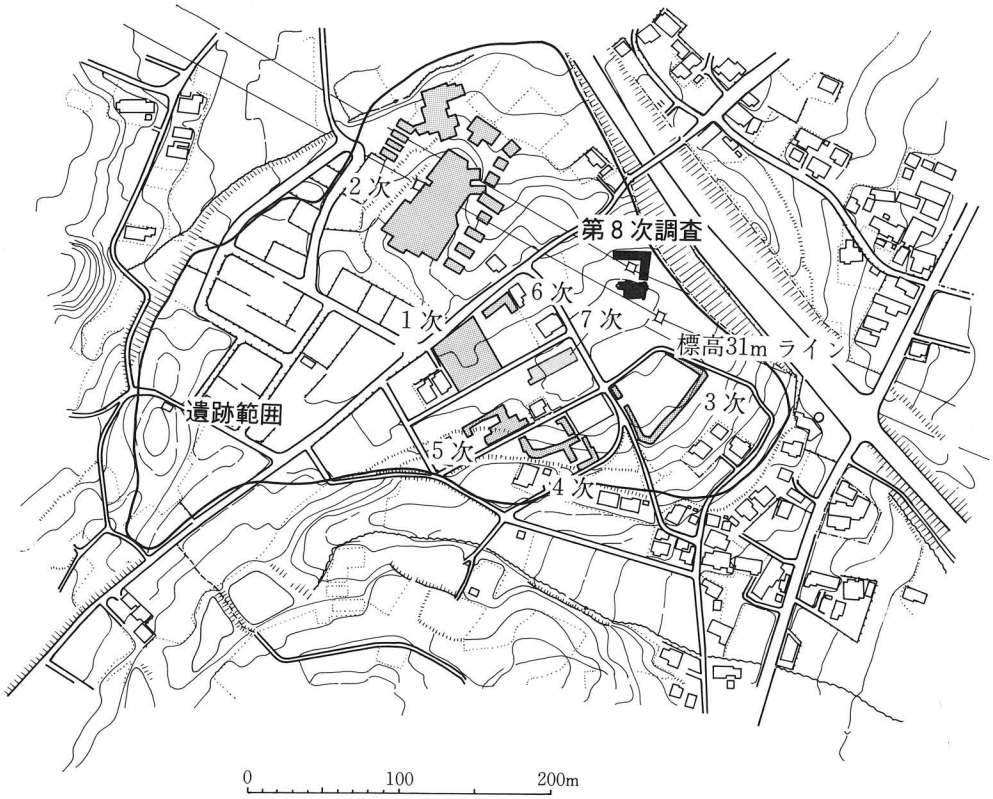
平成２年から平成３年にかけて当市教育委員会は大蓮寺窯跡の発掘調査を実施した。平成５年（1993）に刊行した「大蓮寺窯跡―第２・３次発掘調査報告書－」で、窯跡や灰原から出土した瓦と燕沢遺跡第１～６次調査で出土した瓦の特徴が同じことから、燕沢遺跡に供給された可能性が高いと指摘した。

以上は瓦についての検討が主であるが、瓦の他にも遺跡からは墨書土器が14点出土している。発掘調査の報告では判読不明としていたものを再検討し、平川南は、平成３年（1991）に『国立歴史民俗博物館研究報告第35集』の「墨書土器とその字形―古代村落における文字の実相―」で、燕沢遺跡第２次調査出土の土師器坏の墨書について「山部」と解読している。

また宮本敬一は平成６年（1994）に『栃木県立しもつけ風土記の丘資料館第８回企画展』の展示解説に寄せた「上総国分寺の成立―尼寺の造営過程を中心に―」の中で、燕沢遺跡第３次調査出土の須恵器坏「讀院□」を「讀院坊」と解読して読師院の略称と考えている。

このように見てくると関連する遺跡の発掘例が稀少ななか、内藤政恒の論じた大蓮寺窯跡との関連や工藤雅樹の指摘した宝相華文軒丸瓦の存在は、遺跡の内容を検討する上で重要である。昭和56年以降の発掘調査については、漆紙文書や墨書土器など遺物はきわめて注目されるものが多い。遺構については官衙か寺院かを決定するものは発見されなかった（註18）。とくに大蓮寺窯跡から供給された瓦を葺く建物跡は発見されていない。

これまでの発掘調査の成果を整理した第７次調査の報告のなかで、遺跡の南部に土地の区割り溝や道路状遺構の存在を指摘した。さらに出土した遺物からは寺院の存在を想定し、おおむね平安時代と考えていた。



第３図　調査区位置図

3．調査経過

平成５年度の第７次調査より、遺跡内の最も標高の高い平坦地で発掘調査を実施している。今年度は第７次調査区の北東約60m離れた地点を第８次調査として実施した。この地点は以前より瓦の採集されたところである。

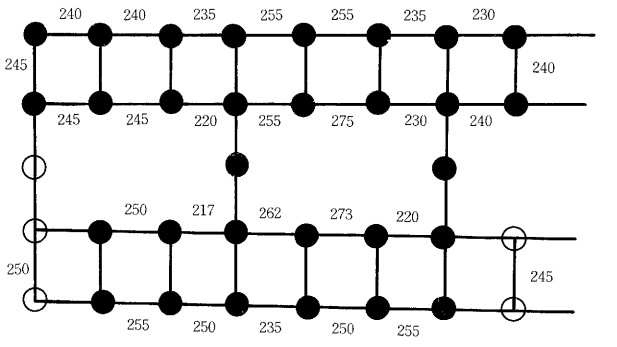
調査区は平坦地の中心に近いＡ区と、平坦地の端部でこれより北では傾斜地となるＢ区の２箇所を設定した。調査を進めるうちにＡ区で掘立柱建物跡が発見され、建物跡の全容を把握するために調査区の拡張を実施している。そのためＡ区の調査区の輪郭が排土場の制約も加わって不規則な不整形となっている。発掘調査は11月４日から実施し、遺構の概要が明らかとなった12月８日に報道発表、12月11日に現地説明会を実施した。調査の全てが終了したのは12月27日であった。

4．発見遺構と出土遺物

第８次調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡１棟、柱列１列、溝跡６条、竪穴遺構２基、土坑１基、小柱穴、ピットなどである。これらの遺構は畑の耕作土（基本層位第II層）の直下の第III層上面で検出されている。遺構番号については第７次調査からの継続番号である。なお遺構のなかには確認するにとどめたものもあり、詳細の明らかでないものは記述を略している。

○　Ａ　区

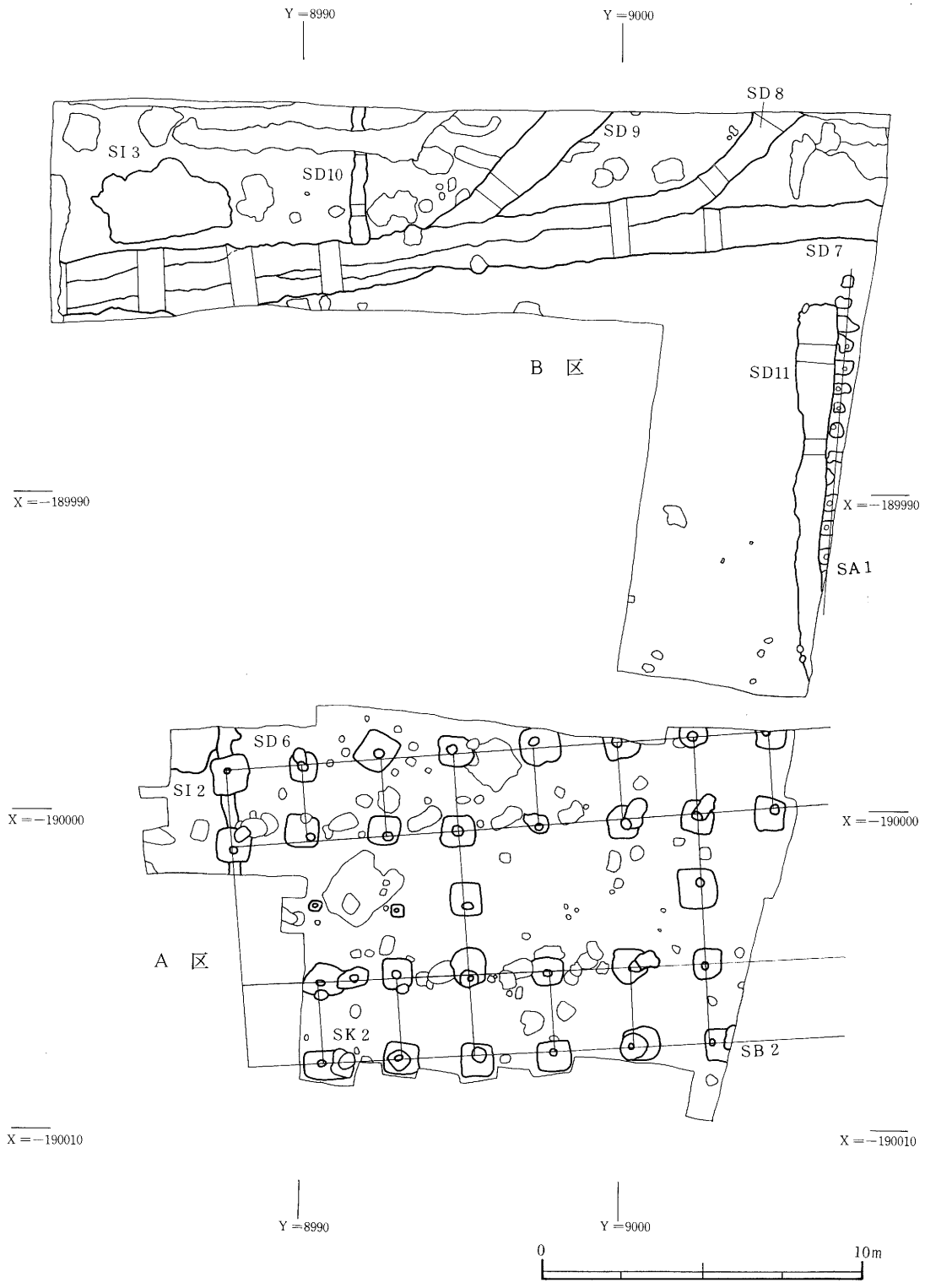
ＳＢ２掘立柱建物跡　南北４間、総長9.6m(柱間寸法210～275cm)、東西７間以上、総長14m以上（柱間寸法217～273cm）の東西に細長い建物跡で、身舎の南と北に廂を有する二面廂の建物跡である。身舎の内部は３間おきに柱穴が配置され、建物内部を仕切っていたと考えられる。この身舎内部を仕切った柱列とその西の柱列との柱間寸法は特に短く、217～230cmとなっている。建物の方向は南北方向でＮ－4°－Ｗである。柱穴の掘り方は一辺90～130cmで、柱痕跡は直径20～32cmである。柱穴の掘り方の深さは26～36cmで基盤岩を掘り込んでいる穴もあり、底面はきわめて硬い。柱穴には抜き取りを受けているものがあり、一部は柱を上部で切り取った「切取穴」状を呈している穴もある。



第４図　ＳＢ２掘立柱建物跡模式図

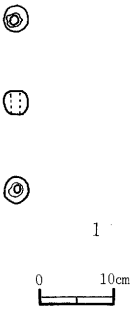
ＳＫ２土坑、ＳＤ６溝跡、Ｐ14、Ｐ17に切られている。

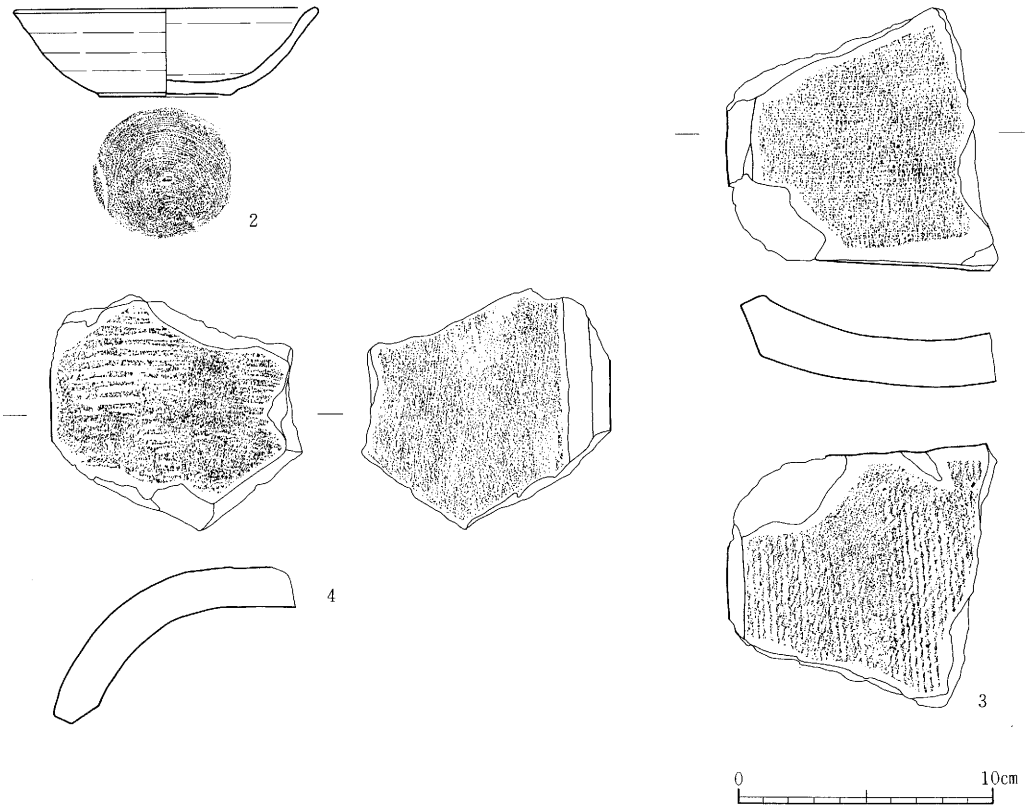
［出土遺物］　柱穴の掘り方埋め土よりＦ－15丸瓦(第６図４)、Ｇ－16平瓦(第８図２)、Ｇ－



第５図　第８次調査区平面図（１/200）

20平瓦（第６図３）、Ｇ－21、26平瓦（第８図３、１）、Ｋ－３切り石（第９図１）、Ｋ－15石匙、Ｋ－17剝片（図版23－９）、Ｋ－18石鏃（図版23－12）、Ｋ－19玉（第６図１）が出土し、抜き取り穴より赤焼き土器Ｄ－13坏（第６図２）、Ｆ－12、13、16丸瓦（第８図１、３、２）、Ｇ－23、32平瓦（第７図５、４）、Ｇ－29平瓦（第８図４）が出土した。この他にも柱穴の掘り方や抜き取り穴の埋め土中から、土師器坏、甕、赤焼き土器坏、甕、須恵器坏、甕、平瓦、丸瓦の細片が出土した。また少量ではあるが縄文土器、弥生土器、石器の小片が出土している。



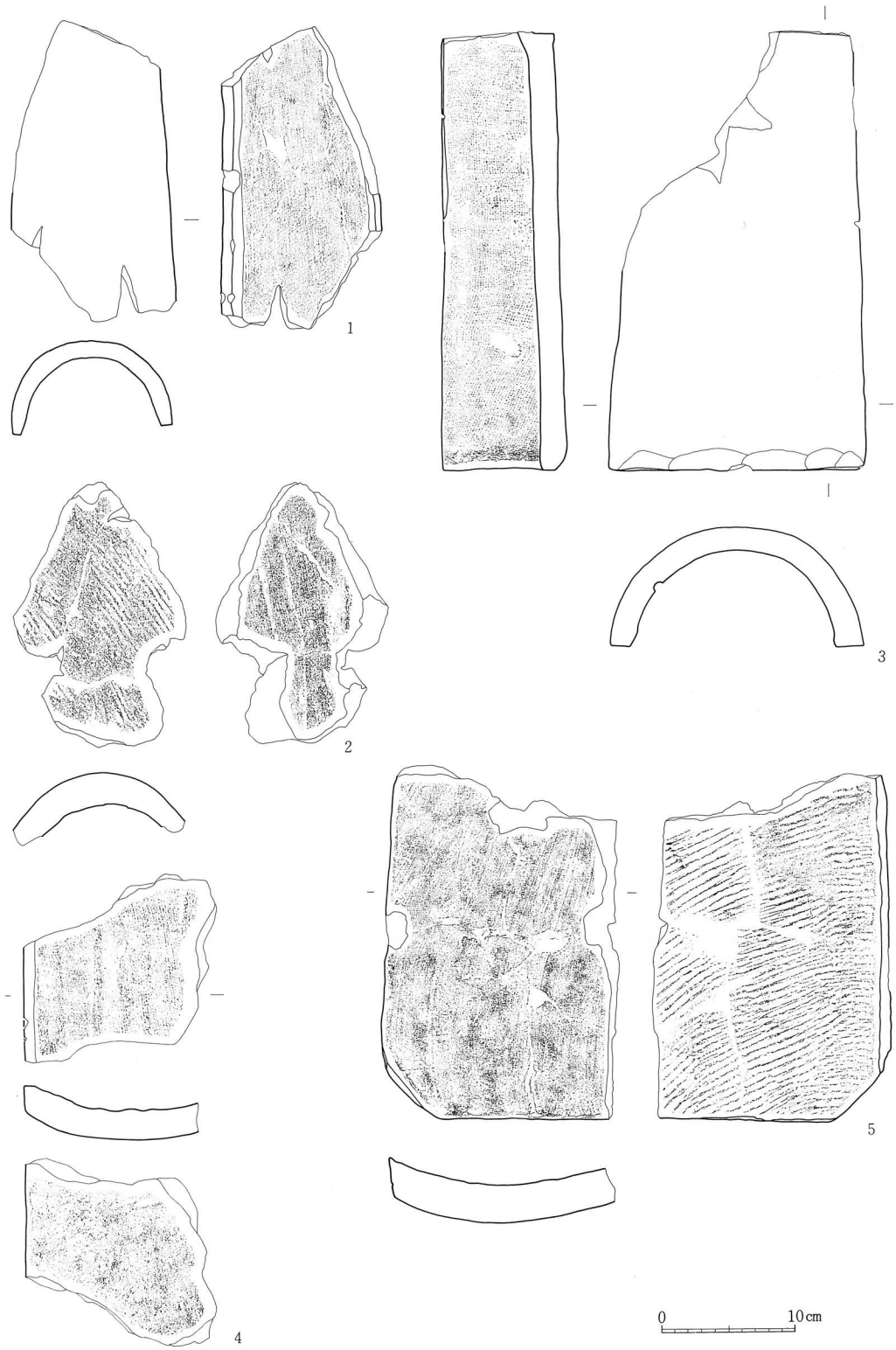


図版番号	登録番号	出土地点 地区	遺構	柱穴	材質	径(mm)	高さ(mm)	孔径(mm)	重さ(g)	色調及び備考	写真図版
1	Ｋ－19	Ａ区	ＳＤ－２	ＮＩＷ２	ガラス？	6.9	6.0	1.6	測定不能		18-1

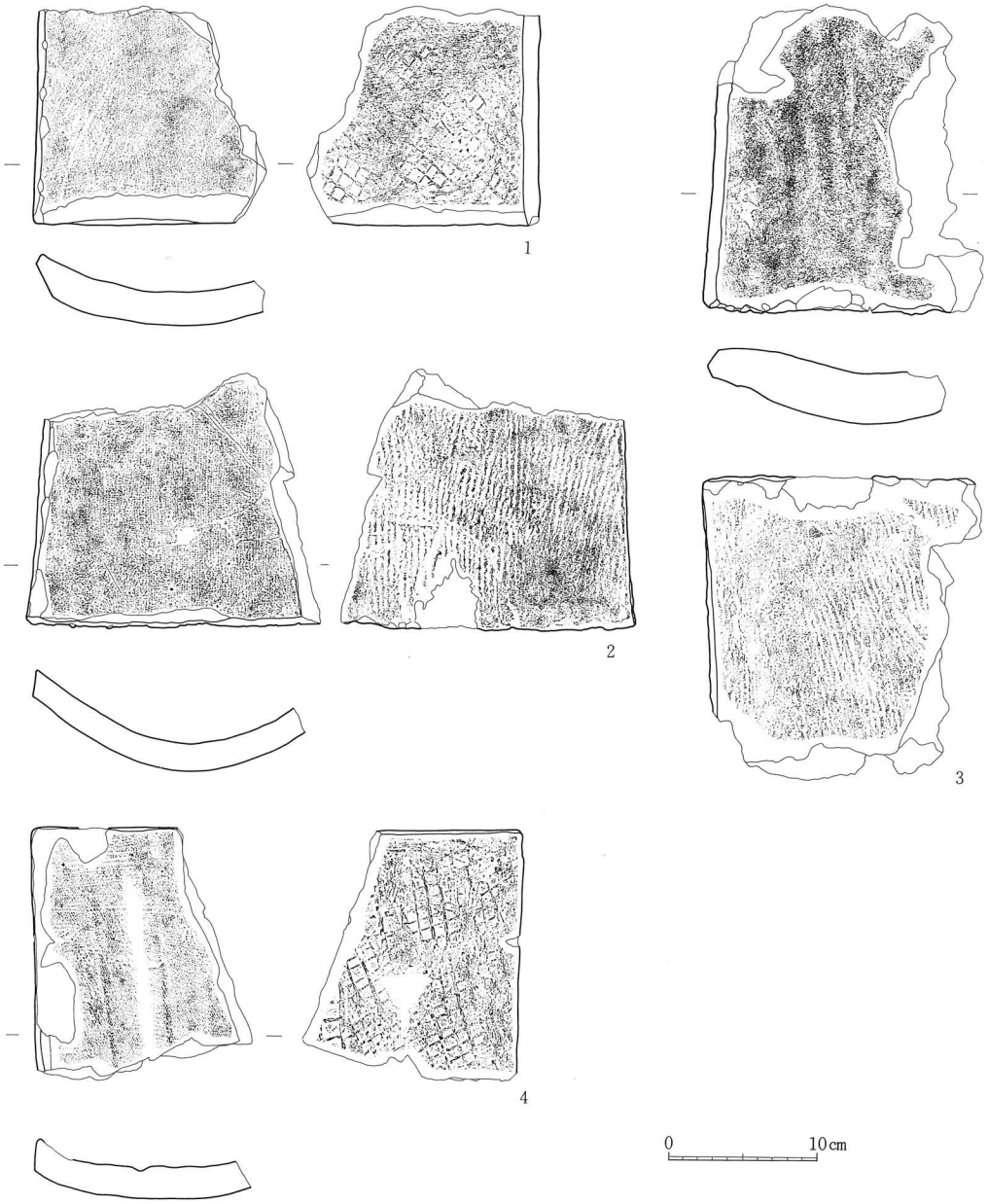
図版番号	登録番号	種別・器形	出土地点 地区	遺構	柱穴	法量(cm) 器高	口径	底径	外面調整 口縁部	体部	底部	内面調整 口縁部	体部	備考	写真図版
2	Ｄ－13	赤焼き土器坏	Ａ区	ＳＢ－２	ＮＷ７	3.4	12	5.4	ロクロナデ		回転糸切り	ロクロナデ		抜き取り穴より出土	20-2

図版番号	登録番号	種別・器形	出土地点 地区	遺	構	細部	特徴	備考	写真図版
3	Ｇ－20	平瓦	Ａ区	ＳＢ－２	Ｎ５Ｗ７	掘り方	凹面布目痕、凸面布面叩き		18-3
4	Ｆ－15	丸瓦	Ａ区	ＳＢ－２	Ｎ１Ｗ４	掘り方	凸面平行叩き、凹面布目痕		18-2

第６図　ＳＢ２掘立柱建物跡出土遺物（1）

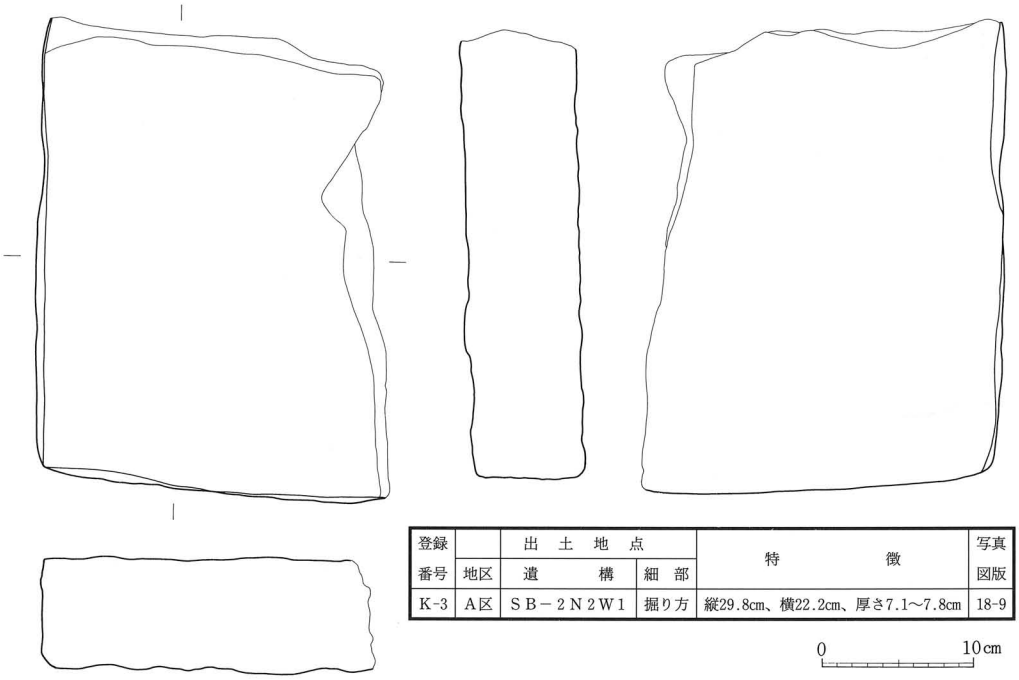


第7図　SB 2掘立柱建物跡出土遺物 (2)



図版番号	登録番号	種別器形	出土地点 地区	出土地点 遺構	出土地点 細部	特徴	備考	写真図版
7－1	F－12	丸瓦	A区	SB－2　N5W4	抜き取り	凸面すり消し、凹面布目痕		19-1
7－2	F－16	丸瓦	A区	SB－2　N5W4	抜き取り	凸面縄叩き、凹面布目痕		18-10
7－3	F－13	丸瓦	A区	SB－2　N5W4	抜き取り	凸面すり消し、ケズリ、凹面布目痕		19-3
7－4	G－32	平瓦	A区	SB－2　N5W4	抜き取り	凹面布目痕、模骨痕、凸面縄叩き、すり消し		18-8
7－5	G－23	平瓦	A区	SB－2　N4W4	抜き取り	凹面布目痕、糸切り、凸面平行叩き		19-4
8－1	G－26	平瓦	A区	SB－2　N4W6	掘り方	凹面布目痕、糸切り、凸面格子叩き		18-7
8－2	G－16	平瓦	A区	SB－2　N2W6	掘り方	凹面布目痕、凸面縄叩き	抜き取り穴からも出土	18-4
8－3	G－21	平瓦	A区	SB－2　N2W6	掘り方	凹面布目痕、凸面縄叩き、押圧痕		18-5
8－4	G－29	平瓦	A区	SB－2　N5W4	掘り方	凹面布目痕、模骨痕、凸面格子叩き		19-2

第8図　SB2掘立柱建物跡出土遺物（3）



登録		出土地点		特徴	写真
番号	地区	遺構	細部		図版
K-3	A区	SB－2N2W1	掘り方	縦29.8cm、横22.2cm、厚さ7.1～7.8cm	18-9

0 10cm

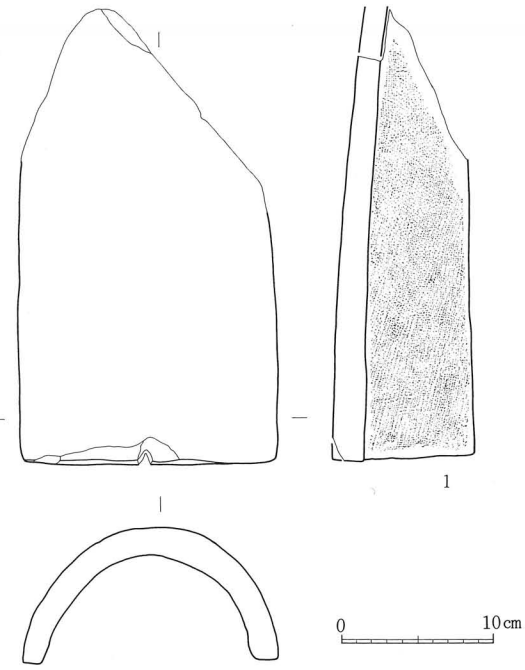
第９図　SB２掘立柱建物跡出土遺物（4）

ＳＩ２竪穴遺構　東西2.2m以上、南北1.4m以上であるが、調査区内で遺構の一部を検出したにすぎない。平面形は不整形と推定され、残存する深さは11～16cmである。壁の傾斜は一定しないが、底面はほぼ平坦である。堆積土は黒褐色粘土である。

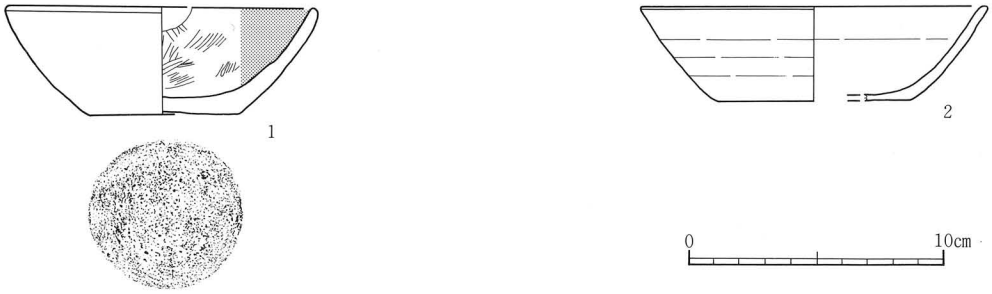
ＳＤ６溝跡に切られている。

［出土遺物］　堆積土中より土師器Ｄ－９坏(第11図１)、須恵器Ｅ－６坏(第11図２)、Ｆ－10丸瓦（第10図１）が出土した。その他土師器坏、甕、赤焼き土器坏、須恵器甕、平瓦片が少量出土している。土師器坏の外面にススの付着したものがある。

ＳＤ６溝跡　総長4.6m以上で、南北に延びる溝跡である。上幅35～45cm、下幅22～36cm、深さ２～５cm、断面形は浅い逆



第10図　SI２竪穴遺構出土遺物（1）



図版番号	登録番号	種別・器形	出土地点 地区	遺構	層位	特徴	備考	写真図版
10-1	F－10	丸瓦	A区	SI－2	1層	凸面すり消し、凹面布目痕		20-1

図版番号	登録番号	種別・器形	出土地点 地区	遺構	層位	法量(cm) 器高	口径	底径	外面調整 口縁部	体部	底部	内面調整 口縁部	体部	底部	備考	写真図版
11-1	D－9	土師器・坏	A区	SI－2	上面	4.3	12.3	5.8				ミガキ				20-3
11-2	E－6	須恵器・坏	A区	SI－2	1層	3.7	13.7	7.6	ロクロナデ		回転ヘラ切り	ロクロナデ			内外面にスス付着	20-4

第11図　SI 2竪穴遺構出土遺物（2）

台形である。方向はN－4°－Wで、堆積土は黒褐色砂質シルトである。

ＳＢ２掘立柱建物跡、ＳＩ２竪穴遺構、P14を切っている。

［出土遺物］　堆積土中より土師器坏、甕、赤焼き土器坏、須恵器坏、縄文土器片、石器剝片が少量出土している。

ＳＫ２土坑　南北80cm、東西72cmの隅丸方形の土坑で、深さは20cmである。底面は北東部分が深く、一段低くなっている。壁はきわめて緩く立ち上がっている。堆積土は黒褐色粘土である。

ＳＢ２掘立柱建物跡を切っている。

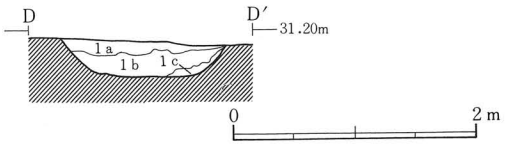
［出土遺物］　堆積土中より土師器坏の小片が２点と底面から人頭大の礫が出土した。

○　Ｂ　区

ＳＤ７溝跡　総長25.9m以上で、東西に延びる溝跡である。重複のない箇所では、上幅100～136cm、下幅64～95cm、深さ21～35cm、断面形は逆台形である。方向はＥ－4°－Ｎで、堆積土は黒褐色シルト・暗褐色シルトである。検出した中央部では270cmほどにわたり底面が浅くなっている。この部分での上幅は65～74cm、下幅32～68cm、深さ６～10cmである。ＳＤ７溝跡より北は標高が低くなり、丘陵の斜面となっている。

ＳＤ９溝跡を切り、ＳＤ８溝跡に切られている。

［出土遺物］　堆積土中より灰釉陶器Ｅ－７

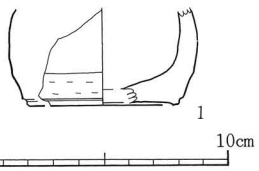


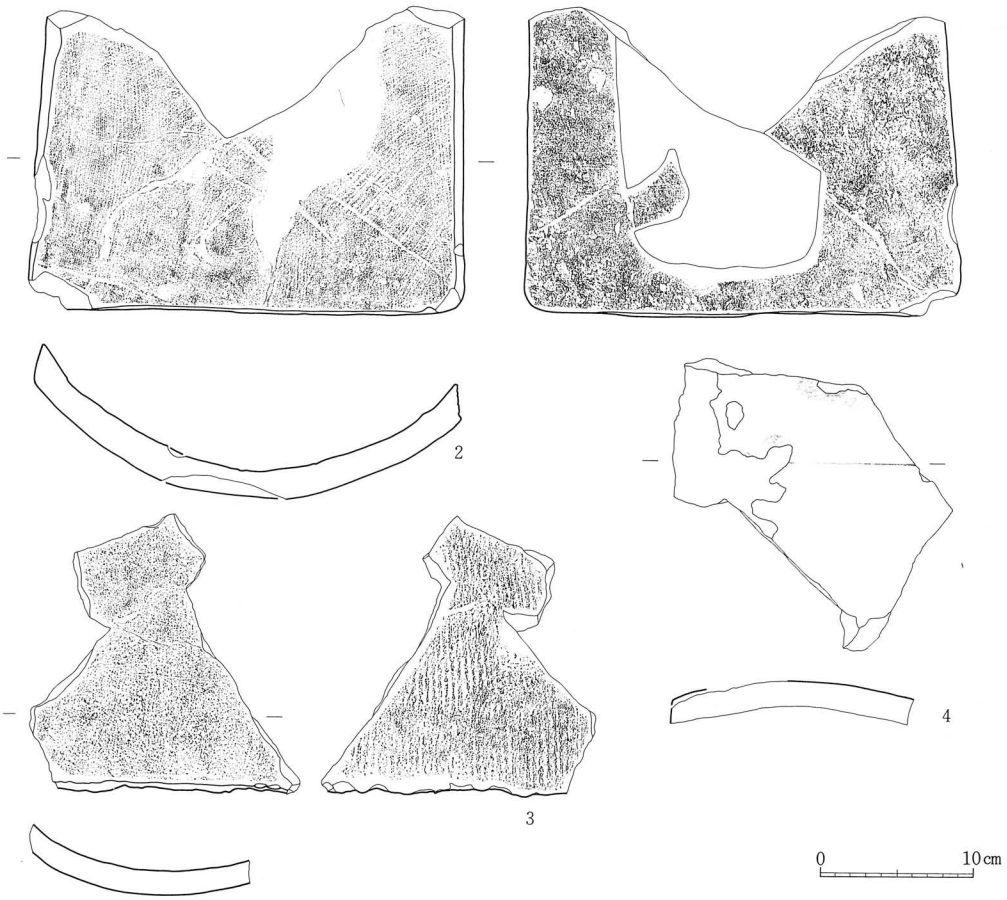
層位	土色	土性	備考
1a	10YR2/3 黒褐色	シルト	地山凝灰岩の微細粒を少量含む
1b	10YR2/3 黒褐色	シルト	地山凝灰岩の細粒を多量に含む
1c	10YR3/4 暗褐色	シルト	地山黄褐色土粒、凝灰岩粒を少量含む

第12図　SD 7溝跡断面図

小瓶片（第13図１）、平行沈線による紋様のある弥生土器片Ｂ－１（第14図６）、Ｂ－２（第14図５）が出土した。土器類ではその他、土師器坏・甕片、赤焼き土器坏・甕片、縄文土器片が出土し、内面にススの付着している土師器坏片が２点含まれている。

また細片ではあるが瓦が多数出土している。うち丸瓦はＦ－９重弁蓮華文軒丸瓦(第14図４)と破片４点のみで、他は平瓦である。凸面に朱が線状に付着しているＧ－13平瓦(第13図４)、凹面にヘラガキされたＧ－14平瓦(第13図３)が出土している。また、平瓦には凸面が縄叩き、平行叩き、格子叩き、さらに縄叩きの後すり消されたものがある。

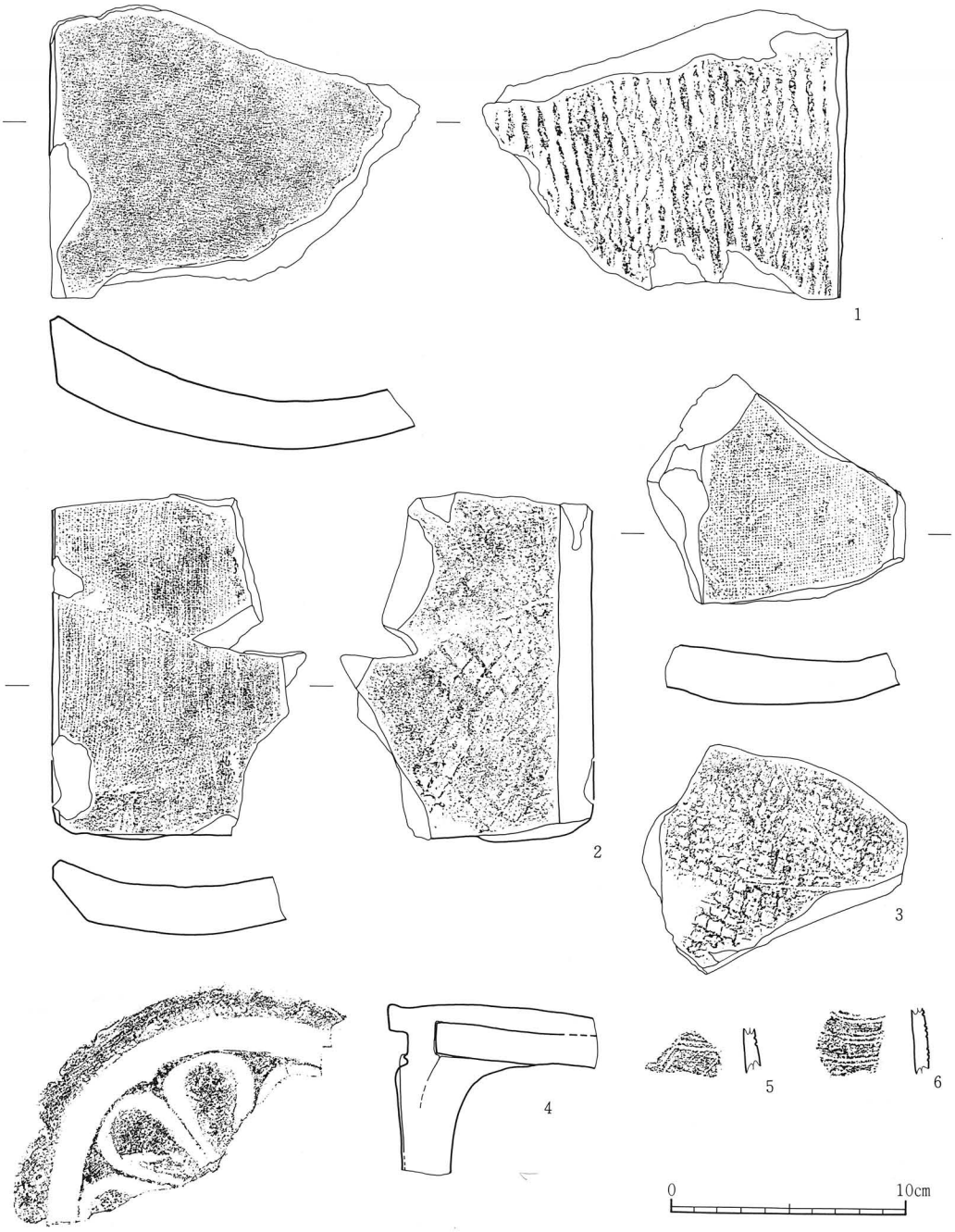




図版番号	登録番号	種別・器形	出土地点 地区	出土地点 遺構名	出土地点 層位	法量(cm) 底径	外面調整 口縁～体部	外面調整 底部	内面調整	色調 内・外面	備考	写真図版
1	Ｅ－７	灰釉陶器・小瓶	Ｂ区	ＳＤ－７	１ｂ層	6.0	ヘラケズリのちロクロナデ	回転糸きり	ロクロナデ	(内)2.5YR7/1 灰白 (外)2.5YR7/2灰黄色	5Y5/3 灰オリーブ色釉付着	21-4

図版番号	登録番号	種別・器形	出土地点 地区	出土地点 遺構名	出土地点 層位	特徴	備考	写真図版
2	Ｇ－15	平瓦	Ｂ区	ＳＤ－７	堆積土中	凹面布目痕・凸面縄叩き→すり消し		
3	Ｇ－14	平瓦	Ｂ区	ＳＤ－７	堆積土中	凹面布目痕・凸面縄叩き		21-7
4	Ｇ－13	平瓦	Ｂ区	ＳＤ－７	堆積土中	凹面欠損・凸面すり消し	軒平瓦の可能性がある	21-10

第13図　ＳＤ７溝跡出土遺物（1）



図版番号	登録番号	種別器形	出土地点 地区	遺構	層位	特徴	備考	写真図版
1	G－17	平瓦	B区	SD－7	堆積土中	凹面布目痕、凸面縄叩き		21－11
2	G－27	平瓦	B区	SD－7	堆積土中	凹面布目痕、凸面格子叩き		21－5
3	G－30	平瓦	B区	SD－7	堆積土中	凹面布目痕、凸面格子叩き		
4	F－9	軒丸瓦	B区	SD－7	堆積土中	重弁蓮華文軒丸瓦		21－6
5	B－2	弥生土器	B区	SD－7	堆積土中	沈線		21－9
6	B－1	弥生土器	B区	SD－7	堆積土中	沈線		21－8

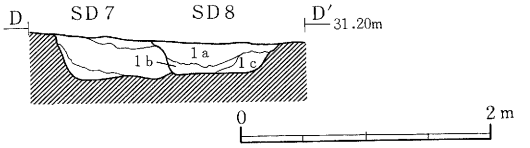
第14図　SD 7溝跡出土遺物（2）

その他、K－4石鏃（図版23－4）、K－5剝片（図版23－7）、K－6剝片（図版23－6）、K－7剝片（図版23－8）、K－8石鏃（図版23－5）が出土している。

ＳＤ８溝跡　総長25m以上で、西方から北（斜面下方）に延びる溝跡である。上幅72～95cm、下幅39～74cm、深さ11～26cm、断面形は逆台形である。底面はやや凹凸があるが、基盤岩層の影響によるものと考えられる。方向はＳＤ７及び９溝跡と重複する部分ではＮ－9°－Ｅであるが、調査区中央付近でＥ－42°－Ｎ方向に緩やかに延び斜面下方に続いている。堆積土は暗褐色シルト・黒褐色シルトである。

ＳＤ７、９、10溝跡を切っている。

［出土遺物］　堆積土中より、内面黒色処理された土師器Ｄ－10坏(第18図１)、赤焼き土器Ｄ－12坏（第18図２）、須恵器Ｅ－５坏（第18図３）、Ｋ－11砥石（第18図４）が出土している。



層位	土　色	土　性	備　考
1a	10YR3/3 暗褐色	シルト	凝灰岩細粒をまばらに含む
1b	10YR3/4 暗褐色	シルト	黄褐色土粒、凝灰岩粒をまばらに含む
1c	10YR3/3 暗褐色	シルト	凝灰岩粒を少量含む

第15図　SD 8溝跡断面図

その他土器類では、土師器坏・甕片、赤焼き土器坏片、須恵器坏・甕片、縄文土器片が出土し、うち内面にススの付着した土師器坏片が１点含まれている。

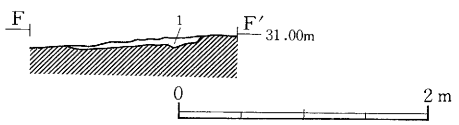
瓦は細片であるが多数出土している。出土した瓦のうち丸瓦は21点、平瓦は61点である。丸瓦は有段のものと無段のものがある。平瓦は凸面が縄叩き、平行叩き、格子叩きがあり、さらに縄叩きの後すり消されたものがある。

その他、K－９石匙（図版23－11）、K－10石鏃（図版23－10）、剝片・チップなどが数点出土した。

ＳＤ９溝跡　総長19.5m以上で、西方から緩やかに弯曲し北に延びる溝跡である。上幅106～120cm、下幅72～100cmで、深さ４～８cmで、壁はわずかに立ち上がり、断面形は削平のため不明である。特に斜面下方では削平が著しく、底面のみ残存する箇所もある。堆積土は黒褐色シルトである。

ＳＤ７、８溝跡に切られている。

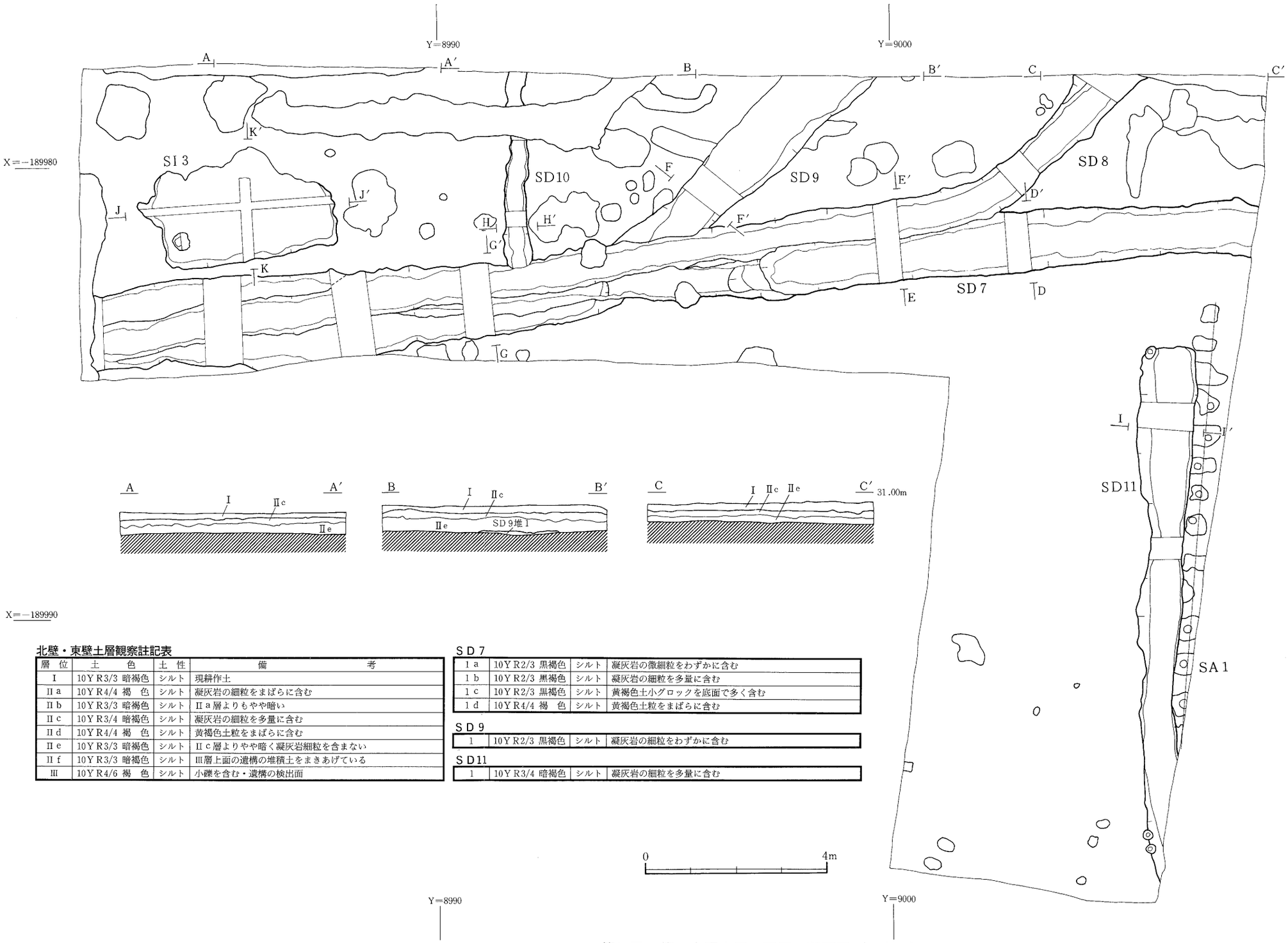
［出土遺物］　堆積土上層より、Ｆ－８宝相華文軒丸瓦（第21図１）が出土している。その他土師器坏片、甕片が少量、瓦の細片が少量、縄文土器片が３点出土している。

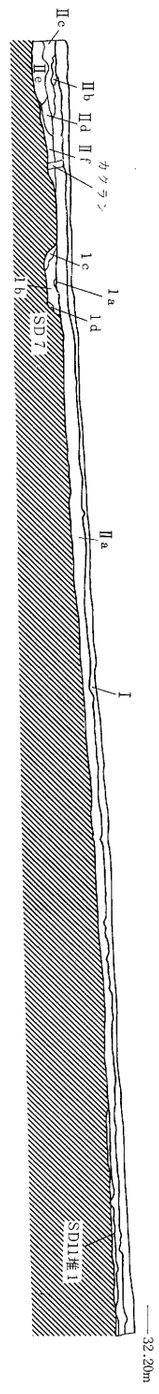


層位	土　色	土　性	備　考
1	10YR2/3 黒褐色	シルト	凝灰岩細粒をわずかに含む

第16図　SD 9溝跡断面図

ＳＤ10溝跡　総長4.2m以上で、南北方向に延びる溝跡である。上幅36～64cm、下幅24～39cm、深さ14cmほどで、断面形はＵ字形である。底面はやや凹凸があるが基盤岩層の影響によるものと考えられる。方向は真北方向である。堆積土は、暗褐色シルト・褐色シルトである。ＳＤ７、





北壁・東壁土層観察註記表

層　位	土　　色	土　性	備　　考
I	10YR3/3 暗褐色	シルト	現耕作土
IIa	10YR4/4 褐　色	シルト	凝灰岩の細粒をまばらに含む
IIb	10YR3/3 暗褐色	シルト	IIa層よりもやや暗い
IIc	10YR3/4 暗褐色	シルト	凝灰岩の細粒を多量に含む
IId	10YR4/4 褐　色	シルト	黄褐色土粒をまばらに含む
IIe	10YR3/3 暗褐色	シルト	IIc層よりやや暗く凝灰岩細粒を含まない
IIf	10YR3/3 暗褐色	シルト	III層上面の遺構の堆積土をまきあげている
III	10YR4/6 褐　色	シルト	小礫を含む・遺構の検出面

SD7

1a	10YR2/3 黒褐色	シルト	凝灰岩の微細粒をわずかに含む
1b	10YR2/3 黒褐色	シルト	凝灰岩の細粒を多量に含む
1c	10YR2/3 黒褐色	シルト	黄褐色土小グロックを底面で多く含む
1d	10YR4/4 褐　色	シルト	黄褐色土粒をまばらに含む

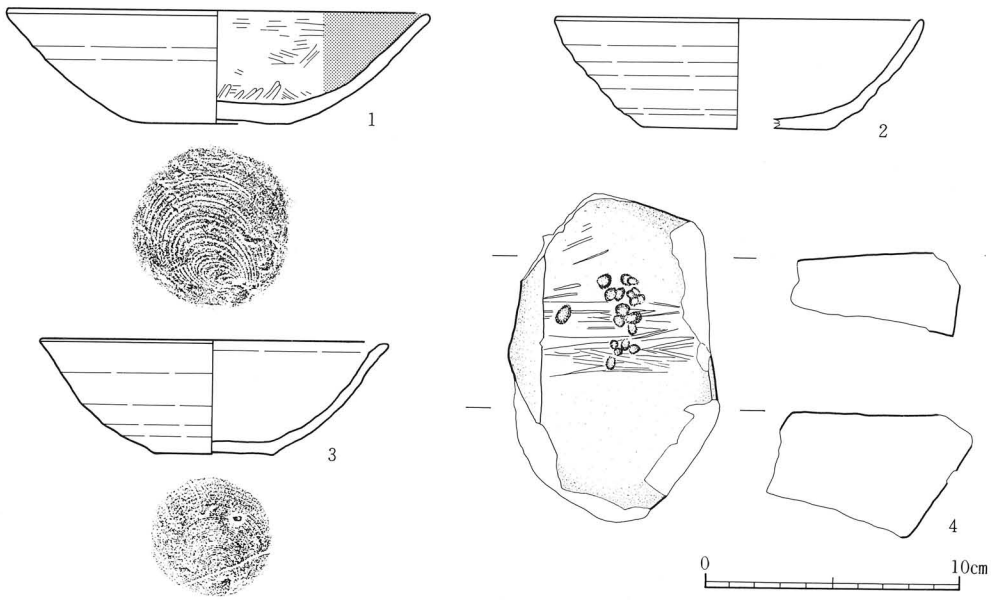
SD9

1	10YR2/3 黒褐色	シルト	凝灰岩の細粒をわずかに含む

SD11

1	10YR3/4 暗褐色	シルト	凝灰岩の細粒を多量に含む

第17図　第8次調査区B区平・断面図（1/100）



図版番号	登録番号	種別・器形	出土地点			法量(cm)			外面調整		内面調整			色調		備考	写真図版
			地区	遺構名	層位	器高	口径	底径	口縁部	体部 底部	口縁部	体部	底部	外面	内面		
1	D−10	土師器・坏	8次	SD−8	堆積土中	4.45	16.6	6.0	ロクロナデ	回転糸切り	ミガキ			10YR8/4 浅黄橙	10YR3/1 黒褐	内面黒色処理	22-2
2	D−12	赤焼き土器坏	8次	SD−8	堆積土中	4.4	14.4	7.5	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ			10YR8/3 浅黄橙	10YR8/3 浅黄橙	再加熱有り	22-3
3	E−5	須恵器・坏	8次	SD−8	堆積土中	4.5	13.8	4.7	ロクロナデ	回転糸切り	ロクロナデ A			2.5Y8/2 灰白	2.5Y8/2 灰白	内外面スス付着	22-1
4	K−11	砥 石	8次	SD−8	堆積土中	長さ13cm、幅8.4cm、厚さ0.9〜5.65cm、平坦面に砥石に似た擦痕と凹石状の凹部がある。											23-3

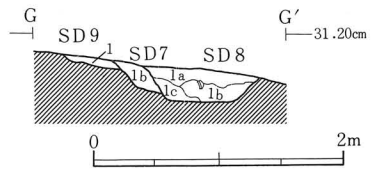
第18図　SD 8 溝跡出土遺物

8、9溝跡と重複する箇所より南（斜面上方）では検出されないこと、SD 7 溝跡とほぼ直交することから同時期に機能していた可能性もある。

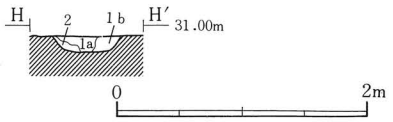
SD 8 溝跡に切られている。

［出土遺物］　堆積土中より、土師器坏片 2 点、甕片 3 点、赤焼き土器坏片が 3 点出土した。

SD11溝跡　総長11.8m 以上で南北に延びる溝跡である。上幅76〜124cm、下幅45〜86cm、深さ 3 〜 5 cm である。西壁はきわめて緩やかに立ち上がり、東壁はわずかに立ち上がる。遺存状況が不良で一部底面のみ確認した箇所もある。断面形は断定できない。斜面下方で途切れている。方向は真北方向である。堆積土は暗褐色シルト・にぶい黄褐色シルトである。

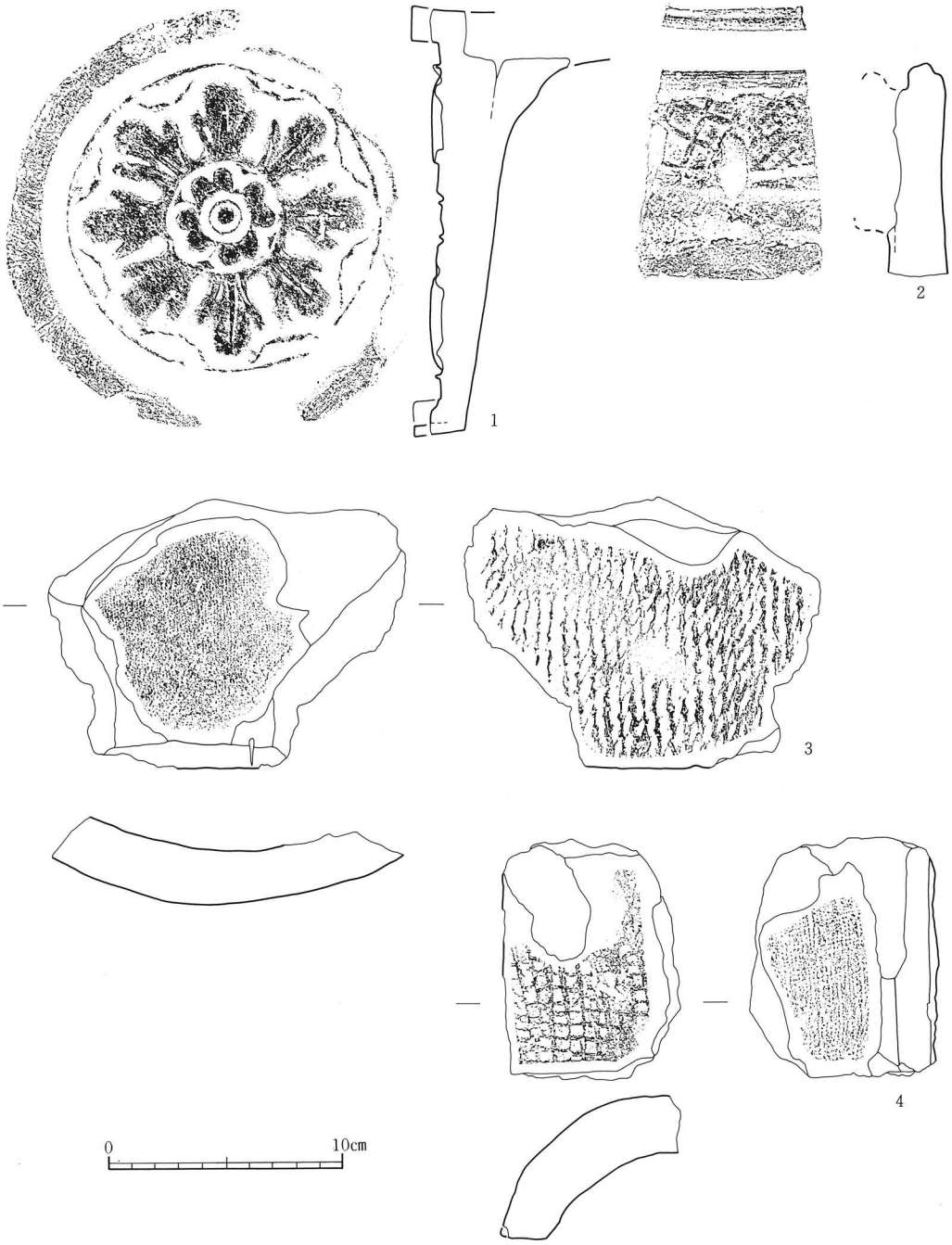


第19図　SD 7 ・ 8 ・ 9 溝跡断面図



層位	土色	土性	備考
1a	10YR3/4 暗褐色	シルト	凝灰岩細粒を少量含む
1b	10YR3/4 暗褐色	シルト	黄褐色土粒をわずかに含む
2	10YR4/6 褐色	シルト	黄褐色土を小ブロック状に含む

第20図　SD 10溝跡断面図

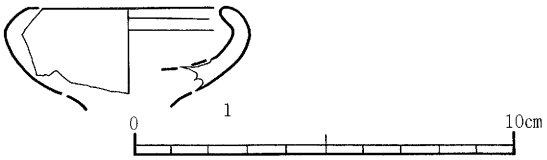


図版番号	登録番号	種別器形	出土地点 地区	遺構	層位	特徴	備考	写真図版
1	F－8	軒丸瓦	B区	SD－9	堆積土中	宝相華文軒丸瓦		22－6
2	G－12	軒平瓦	B区	SD－8	堆積土中	重弧文軒平瓦		23－2
3	G－18	平瓦	B区	SD－10	堆積土中	凹面布目痕、凸面縄叩き		22－8
4	F－17	丸瓦	B区	SD－8	堆積土中	凸面格子叩き、凹面布目痕		22－5

第21図　SD 8 ・ 9 ・10溝跡出土遺物

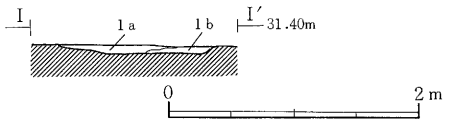
ＳＡ１柱穴列を切っている。

［出土遺物］　堆積土中より、陶器Ｉ－２瓶(ひょう)子(そく)（第23図１）、須恵器坏細片が３点出土した。



図版番号	登録番号	種別・器形	出土地点 地区	出土地点 遺構名	出土地点 層位	法量(cm) 口径	法量(cm) 器高	備考	写真図版
1	Ｉ－２	陶器・ひょうそく	Ｂ区	ＳＤ－11	堆積土中	(5)	(2.5)	鉄釉	22－５

第23図　SD 11溝跡出土遺物



層位	土色	土性	備考
1a	10ＹＲ3/4 暗褐色	シルト	凝灰岩細粒を多量に含む
1b	10ＹＲ4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	黄褐色土小ブロックを含む

第22図　SD 11溝跡断面図

ＳＩ３竪穴遺構　東西3.8m、南北2.4m以上であるが、北半部は削平のため残存しない。平面形は隅丸方形を呈すると考えられるが一定していない。南壁での方向は、Ｅ－9°－Ｎである。残存する深さは９～19cmであるが、北端部は底面のみを確認した。南壁はやや外傾するがほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は、黒褐色シルト・暗褐色シルトで人為的に埋め戻されたと考えられる。柱穴は検出されなかったが、底面の一部で焼けた痕跡と小ピットを検出している。

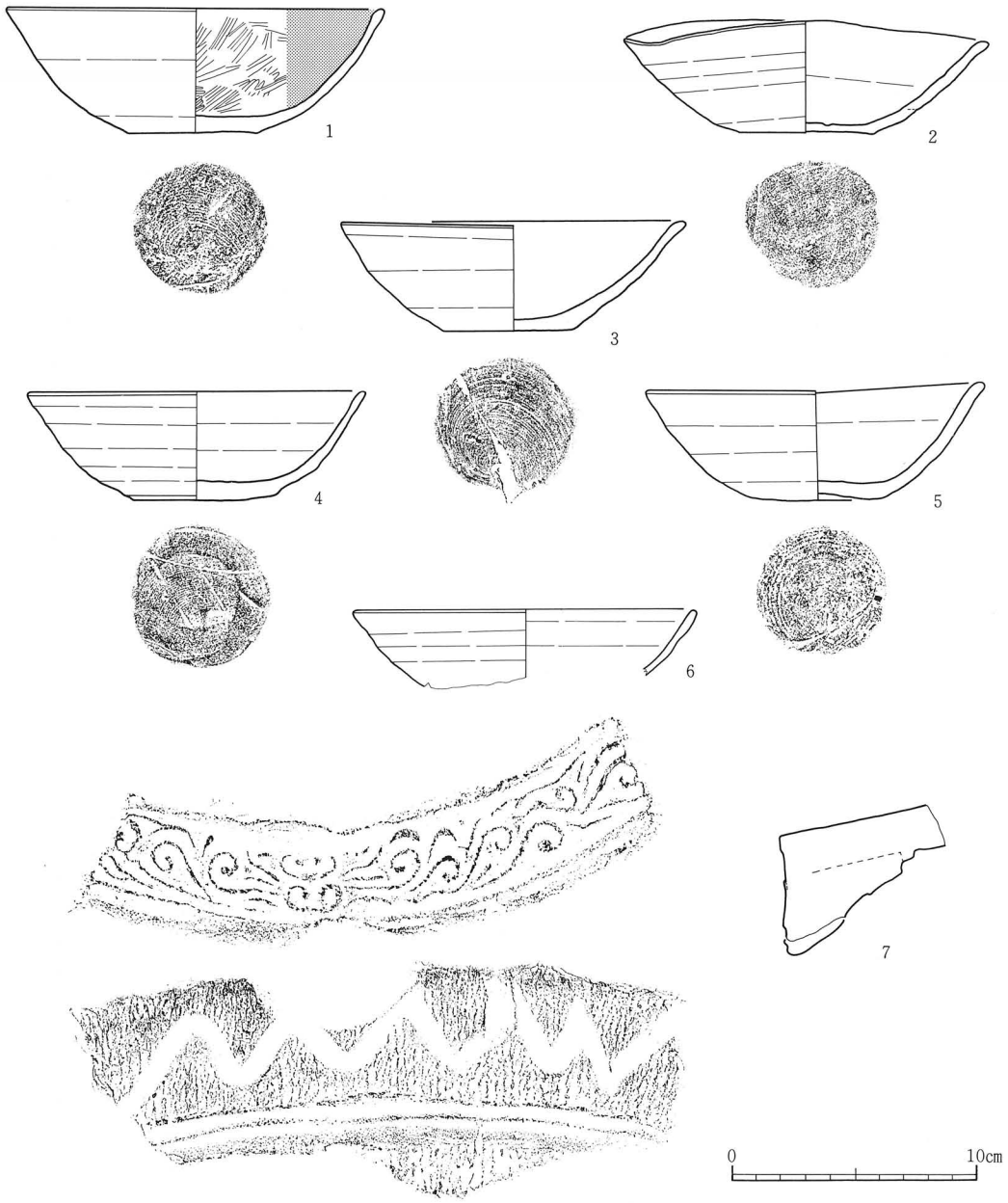
［出土遺物］　埋め土中より、内面黒色処理された土師器Ｄ－17坏（第24図１）、赤焼き土器Ｄ－１高台付皿（第26図７）、Ｄ－２坏（第26図６）、Ｄ－４坏（第26図５）、Ｄ－５坏（第26図３）、Ｄ－８高台付坏（第26図８）、Ｄ－14坏（第26図１）、Ｄ－16坏（第26図４）、須恵器Ｅ－２坏（第24図２）、Ｅ－３坏（第24図４）、Ｅ－４坏（第24図６）、Ｅ－９坏（第24図５）が出土した。また底面で検出したピット状の落ち込みより赤焼き土器Ｄ－15坏（第26図２）、須恵器Ｅ－８坏（第24図３）が出土している。このうちＤ－７は内面の一部に、またＤ－16は内外面の一部にススが付着している。またＧ－11均整唐草文軒平瓦（第24図７）、鉄製品Ｎ－１鋤先（第26図９）、Ｋ－14剝片が出土した。その他土師器坏・甕片、赤焼き土器坏・高台付坏片、須恵器坏・甕片などが出土している。Ｄ－15、Ｅ－８、Ｎ－１を除き全てが埋め土中からの出土である。

ＳＡ１柱列　南北方向に延びる柱列で、方向はＮ－4°－Ｅである。Ｂ区南東端から12.8mにわたって検出し、ＳＤ７溝跡付近で途切れている。柱穴掘り方は、一辺32～62cmほどで隅丸方形を主とするが、不整の円形や平面形の一定しないものもある。柱痕跡は16～18cmである。柱間寸法は62～85cm（平均71.8cm）で一定ではない。掘り方埋土は基盤層の凝灰岩細粒を多く含む褐色シルトで、柱痕跡は暗褐色シルトである。

ＳＤ11遺構に切られている。

［出土遺物］　遺物は出土していない。

以上であるが、その他に表土、遺構検出面から第27図～第29図に図示した遺物などが出土している。



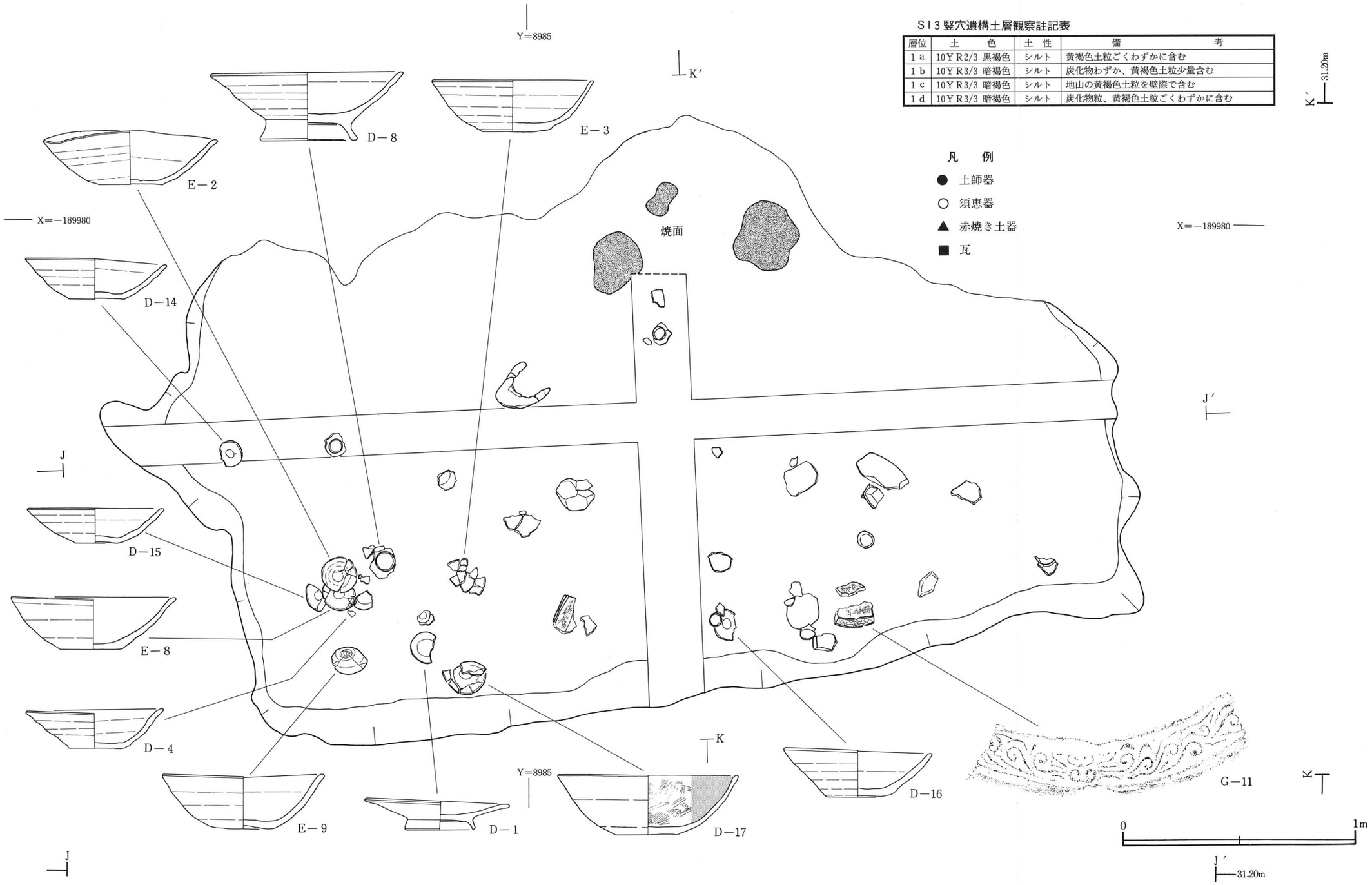
図版番号	登録番号	種別・器形	出土地点			法量(cm)			外面調整			内面調整			色調		備考	写真図版
			地区	遺構	層位	器高	口径	底径	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	外面	内面		
1	D－17	土師器・坏	B区	SI－3	1層	5.2	15.7	5.3	回転ヘラケズリ＋ロクロナデ		回転糸切り	ロクロナデのちミガキ			10YR8/3 浅黄橙	黒色処理		21-2
2	E－2	須恵器・坏	B区	SI－3	1層	4.6	14.3	5.4	ロクロナデ		手持ヘラケズリ	ロクロナデ C			10YR8/1 灰白色	10YR8/1 灰白色		20-5
3	E－8	須恵器・坏	B区	SI－3	底面	4.5	7.25	5.4	ロクロナデ		回転糸切り	ロクロナデ D			2.5YR8/2 灰白色	10YR8/1 灰白色	口縁部に線状のコゲ目	20-8
4	E－3	須恵器・坏	B区	SI－3	1層	4.5	14	5.8	ロクロナデ		回転糸切り＋ヘラケズリ	ロクロナデ D			2.5YR8/1 灰白色	2.5YR8/1 灰白色	口縁部にコゲ目有り	20-6
5	E－9	須恵器・坏	B区	SI－3	1層	4.7	14.4	5.3	ロクロナデ		回転糸切り	ロクロナデ B			10YR8/1 灰白色	10YR7/2 にぶい黄橙		20-9
6	E－4	須恵器・坏	B区	SI－3	北西半堆	3.2(推)	14.2	—	ロクロナデ		—	ロクロナデ D			2.5YR8/2 灰白色	2.5YR8/2 灰白色		20-7
7	G－11	軒平瓦	B区	SI－3	1層	瓦当面－均整唐草文、凹面－布目痕、凸面－縄叩き痕のちスリケシ												21-3

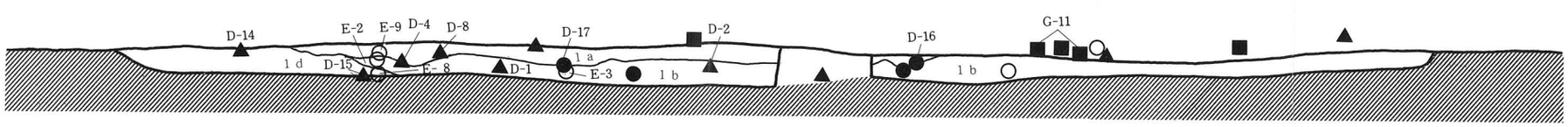
第24図　SI 3竪穴遺構出土遺物（1）

S I 3 竪穴遺構土層観察註記表

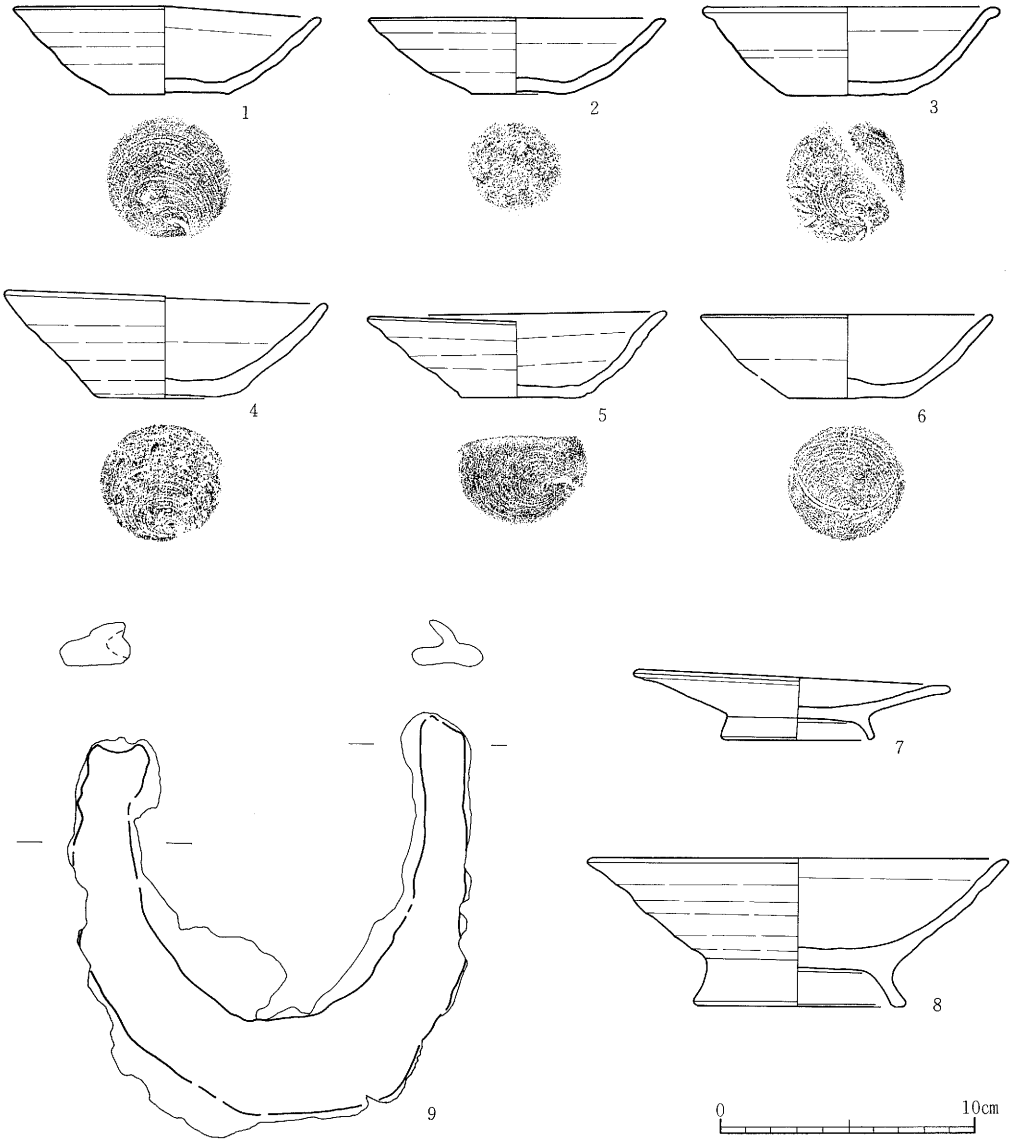
層位	土　色	土　性	備　考
1 a	10Y R2/3 黒褐色	シルト	黄褐色土粒ごくわずかに含む
1 b	10Y R3/3 暗褐色	シルト	炭化物わずか、黄褐色土粒少量含む
1 c	10Y R3/3 暗褐色	シルト	地山の黄褐色土粒を壁際で含む
1 d	10Y R3/3 暗褐色	シルト	炭化物粒、黄褐色土粒ごくわずかに含む

凡　例
- ● 土師器
- ○ 須恵器
- ▲ 赤焼き土器
- ■ 瓦



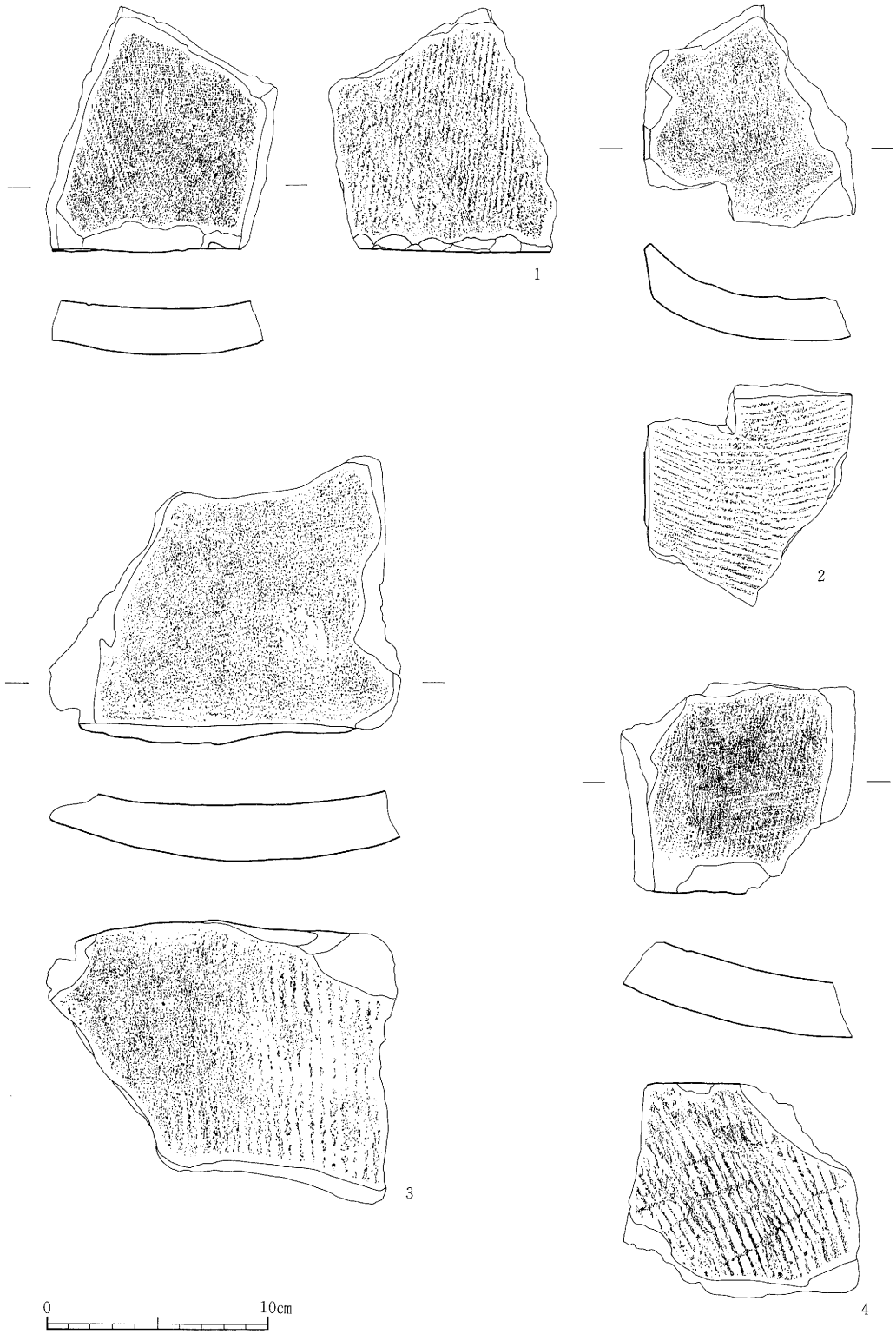


第25図　SI 3 竪穴遺構平・断面図（1 / 20）

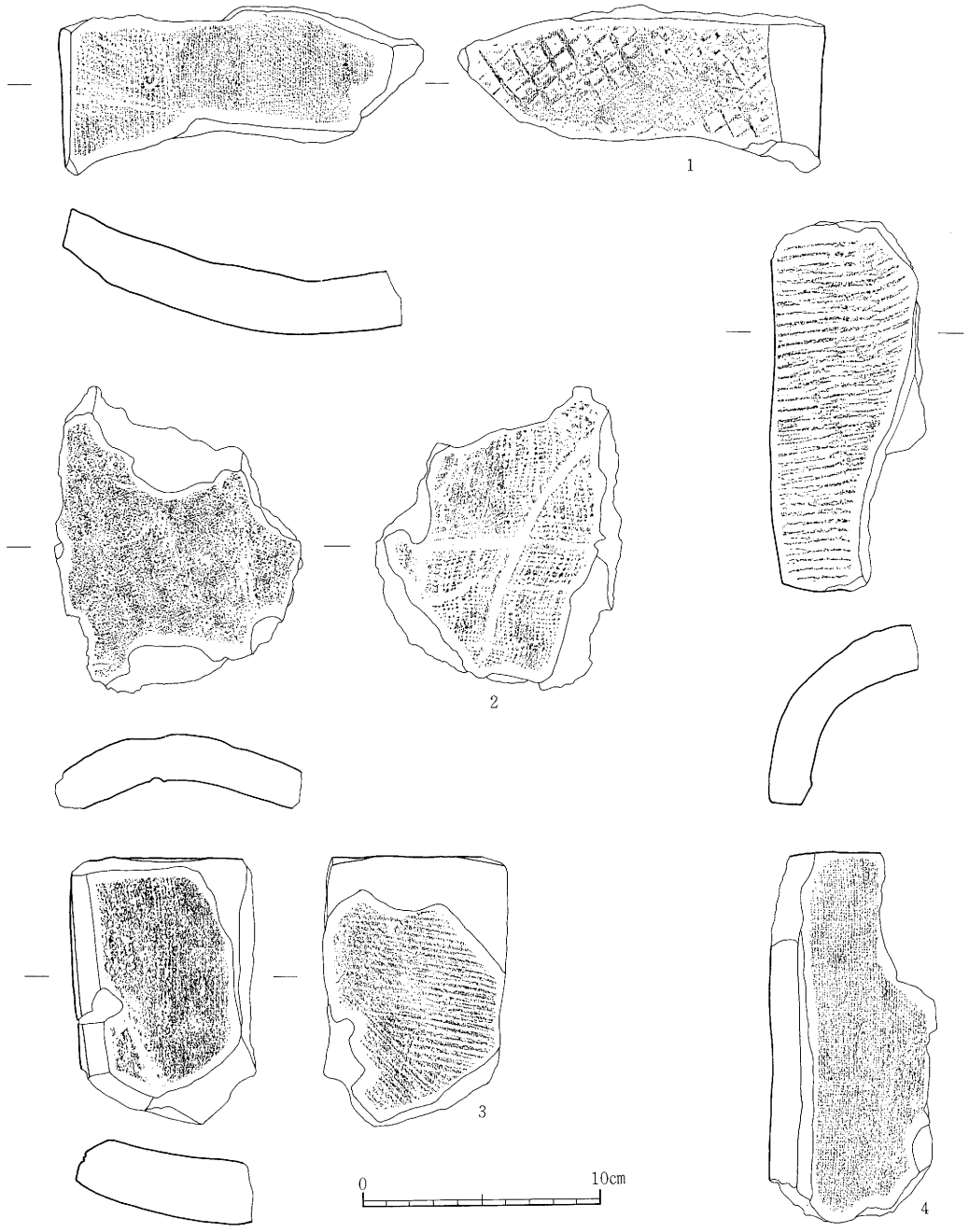


図版番号	登録番号	種別・器形	出土地点			法量(cm)			外面調整			内面調整			色調		備考	写真図版
			地区	遺構	層位	器高	口径	底径	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	外面	内面		
1	D－14	赤焼き土器・坏	B区	SI－3	1層	3.4	11.6	4.6	ロクロナデ		回転糸切り	ロクロナデ			7.5YR7/6 橙	7.5YR7/1 明褐灰	再加熱有り	20-15
2	D－15	赤焼き土器・坏	B区	SI－3	底面P	3.0	11.7	3.7	ロクロナデ		回転糸切り	ロクロナデ A			7.5YR8/4 浅黄橙	7.5YR7/6 橙	内面にスス油煙状に付着 外面10R4/8赤顔料付着	20-16
3	D－5	赤焼き土器・坏	B区	SI－3	南東半部堆	3.5	(11.7)	4.9	ロクロナデ		回転糸切り	ロクロナデ A			7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR にぶい橙	内面にスス帯状に付着 外面再加熱有り	20-13
4	D－16	赤焼き土器・坏	B区	SI－3	1層	4.15	12.8	4.8	ロクロナデ		回転糸切り	ロクロナデ			5YR7/6 橙	5YR7/6 橙	内外面にスス多量に付着	21-1
5	D－4	赤焼き土器・坏	B区	SI－3	1層	3.3	11.8	4.8	ロクロナデ		回転糸切り	ロクロナデ			10YR8/3 浅橙	10YR8/3 浅黄橙		20-12
6	D－2	赤焼き土器・坏	B区	SI－3	1層	3.3	(11.6)	4.5	ロクロナデ		回転糸切り	ロクロナデ A			7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	内外面にスス付着	20-11
7	D－1	赤焼き土器・高台付Ⅲ	B区	SI－3	1層	2.65	12.5	6.2	ロクロナデ		回転糸切り＋付高台	ロクロナデ			7.5YR7/6 橙	7.5YR8/3 浅黄橙	再加熱有り	20-10
8	D－8	赤焼き土器・高台付坏	B区	SI－3	1層	6.0	16.5	8.3	ロクロナデ		回転糸切り＋付高台	ロクロナデ			7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	10R4/8赤顔料付着	20-14
9	N－1	鉄製品・鋤先	B区	SI－3	底面	16.2			2.19～4.41			1.26～1.81						23-1

第26図　SI 3竪穴遺構出土遺物（2）

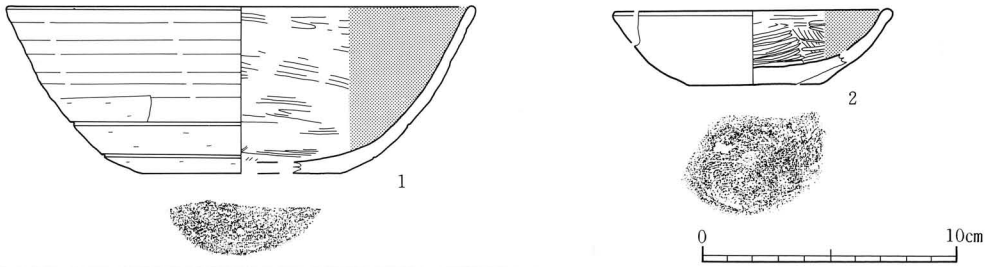


第27図　その他の出土遺物（1）



図版番号	登録番号	種別 器形	出土地点 地区	遺構	層位	特徴	備考	写真図版
27－1	G－19	平瓦	A区	表土		凹面布目痕、糸切り、凸面縄叩き		19－6
27－2	G－24	平瓦	B区	表土		凹面布目痕、凸面平行叩き		22－12
27－3	G－22	平瓦	A区	表土		凹面布目痕、凸面縄叩き		19－5
27－4	G－31	平瓦	B区	遺構検出面		凹面布目痕、凸面格子叩き		22－9
28－1	G－28	平瓦	B区	遺構検出面		凹面布目痕、凸面格子叩き、ケズリ		22－11
28－2	F－11	丸瓦		遺構検出面		凸面すり消し、凹面布目痕ヘラ書き	凹面「＋」	22－13
28－3	G－25	平瓦	B区	遺構検出面		凹面布目痕、凸面平行叩き		22－14
28－4	F－14	丸瓦		P－17		凸面平行叩き、凹面布目痕		22－7

第28図　その他の出土遺物（2）



図版番号	登録番号	種別・器形	出土地点			法量(cm)			外面調整			内面調整			備考	写真図版
			地区	遺構	層位	器高	口径	底径	口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部		
1	D－11	土師器・坏	B区	表土	—	6.6	(18.5)	(8)	ロクロナデ＋回転ヘラケズリ		回転ヘラケズリ	ロクロナデのちミガキ			内面黒色処理	19-7
2	D－3	土師器・坏	B区	表土	—	2.95	(11)	(5.4)	ロクロナデ		回転糸切り	ミガキ			内面黒色処理・スス付着	22-10

第29図　その他の出土遺物（3）

5．ま　と　め

今回の第８次調査で発見された遺構は、掘立柱建物跡１棟、柱列１列、溝跡６条、竪穴遺構２基、土坑１基、小柱穴、ピットなどである。ここでは若干の考察を加えながら、以下の項目ごとに検討し「まとめ」としたい。

(1)　SB２掘立柱建物跡について

燕沢遺跡ではこれまでの発掘調査で、掘立柱建物跡が10棟ほど発見されている。それらと比較してＳＢ２掘立柱建物跡は、柱の掘り方や柱痕跡が最も大きなものであり、主要な建物跡であったと考えられる。この建物跡は南と北に廂をもち、身舎内部にも柱が配置された東西に長い建物跡である。東西の全長は明らかではないが身舎内部の柱穴の配置から、少なくともさらに２間分は東に延びて９間以上と推定される。このような建物跡は多賀城廃寺の僧房である「大房」、上総国分尼寺跡や武蔵国分尼寺跡の尼房跡などと言われている建物跡と共通点が指摘される。とくに多賀城廃寺の大房とは、柱穴の配置形態や規模において類似する点を見出せる。多賀城廃寺の僧房には大房と小子房と言われる２棟の建物跡がある。その内の大房は創建期が掘立柱式で、平安時代に礎石式に建て替えられている。柱穴の配置や内部が３間１房となる箇所がある点では掘立柱式の大房と同じであるが、桁行（東西）の柱間寸法が梁行（南北）の柱間寸法より総じて長いことや、桁行で身舎と廂の柱間寸法が同じであること、梁行の総長などでは礎石式の大房にも類似している。以上のことからこの建物を寺院の「僧房」とみておきたい。

この建物跡の柱の掘り方や抜き取り穴からは、瓦や土器片が出土している。瓦は平瓦や丸瓦の小破片であるが、平瓦では格子叩きの施された桶巻き作りの瓦や、縄叩きが施され凹型台の圧痕の残る一枚作りの瓦などが出土している。それらは７世紀末頃と考えられている大蓮寺窯跡出土の瓦や、多賀城の創建期からIII期までの建物に使用された瓦で、７世紀の末から８世紀の末までの年代幅が考えられる。それらが柱の掘り方埋め土に入るということは、ＳＢ２掘立柱建物が平安時代初頭以降に建てられたものであることを示している。ただし建物の解体時に

掘られた柱の抜き取り穴からは瓦片とともに、ほぼ完形の赤焼き土器Ｄ－13坏が出土している。この赤焼き土器の坏については、多賀城跡から出土した土器群と比較すると、Ｅ群土器あるいはＦ群土器とされる土器群の中の須恵系土器の範疇に含まれるものである。土器群の年代はＥ群土器が10世紀前半頃、Ｆ群土器が10世紀中頃と位置づけられている(註19)。本遺跡のＳＢ２建物跡からはＦ群土器に含まれる須恵系土器の小形坏類が出土していない。したがって本遺跡出土の赤焼き土器Ｄ－13坏については、多賀城跡出土土器のＥ群土器の年代が与えられよう。これにより建物が解体された年代についても10世紀前半以降とみられるが、Ｆ群土器とされた土器が含まれていないことから10世紀前半代と考えられる。建物の建てられた年代についても掘り方から赤焼き土器が出土し、９世紀代に遡る土器類が出土していないことから、ほぼ10世紀前半代の中におさまるものと考えられる。

⑵ ＳＤ７・８・９・11溝跡とＳＡ１柱列について

各溝跡と柱列の重複関係を整理すれば、次のようになる。(並列関係は、必ずしも遺構の同時性を示すものではない。)

ＳＤ９溝跡→ＳＤ７溝跡→ＳＤ８溝跡

ＳＤ10溝跡

ＳＡ１柱列→ＳＤ11溝跡

①ＳＤ９溝跡・宝相華文軒丸瓦について

ＳＤ９溝跡の上層からは、Ｆ－８宝相華文軒丸瓦が出土している。直径18.5cmで、８葉である。瓦当の厚さは２cmほどである。瓦当文様は中房部の中央に一個の円形の蓮子が配される。また外側には４枚の小花弁と、中心に向かって稜線を持つごく小さい間弁が配される。花弁は葛葉状の高まりとして表現され、葉脈状に中央線が表現されている。花弁の外形線に呼応するように隆起した波状の線がこれを取り囲んでいる。宝相華文軒丸瓦については、多賀城跡第Ⅳ期に比定されている。また第３次調査でも同様の瓦が出土しており、燕沢遺跡に特有の瓦であることが指摘されている（註20)。実年代については、宝相華文軒丸瓦は貞観11年（869年）の陸奥国大地震後の修復瓦として、貞観13年９月に陸奥国修理府に配属された新羅人によってもたらされたものと考えられる（註21)。このことから本遺跡の瓦は、貞観13年（871年）以降の遺物と考えられる。よってＳＤ９溝跡は、９世紀後半以降に埋没したものと考えられる。

②ＳＤ７・８・10溝跡と出土遺物について

ＳＤ７・８・10溝跡からは図示した遺物のほかに、細片ではあるが赤焼き土器片が出土している。前述のとおり多賀城跡出土土器群の中では、この赤焼き土器は須恵系土器の範疇に含まれるもので、Ｅ群土器の段階からみられるようになる(註22)。Ｅ群土器の年代は10世紀前半に

位置付けられていることから、これらの溝跡も10世紀前半以降に埋没したものと考えられる。

またこれらの溝跡から出土した遺物について、若干検討してみたい。

ＳＤ７溝跡からは灰釉陶器Ｅ－７小瓶の底部片と、Ｆ－９重弁蓮華文軒丸瓦が出土している。Ｅ－７は外面が灰黄色、内面が灰白色で灰オリーブ色の釉が施されている。胎土は白色で固く緻密である。底部にはわずかではあるが高台を作り出している。これは、猿投山西南麓古窯跡群の黒笹14号窯式に類例をみることができ、９世紀前半以降の年代が考えられている（註23)。Ｆ－９は中房部が遺存しないが、推定直径は18.6cm、瓦当部の厚さは2.2cmほどである。蓮弁の端部は丸みを帯び、小蓮弁は明瞭ではない。間弁は銀杏形の端部と隆線部からなっており、蓮弁を取り囲むようにめぐっている。この文様は、東北大学が所蔵する燕沢遺跡出土とされる重弁蓮華文軒丸瓦にきわめて類似している(註24)。また、中房部が欠損しており速断はできないが、多賀城跡や陸奥国分寺跡からはこれまで出土していないものである。

ＳＤ８溝跡から出土した須恵器Ｅ－５坏、底部切り離し技法が回転糸切り無調整である。外面ではロクロ目が顕著であるが、内面では口縁部にみられるのみで体部では明瞭ではない。器形は体部下半でふくらみ、口縁部でやや外反している。内外面ともススが付着しており、内面は油煙状に薄く観察される。外面には多量に付着しており、同じような用途に使用された土器に重ねたと考えられるものである。

③ＳＤ11溝跡・ＳＡ１柱列について

ＳＤ11溝跡からはＩ－２秉燭が出土している。内外面に黒褐色の鉄釉が施されているが、釉薬の塗りが不均一である。これは胎土や焼成の特徴から近世のものと考えられる(註25)。よってＳＤ11溝跡は他の遺構と異なり、近世に埋没したものと考えられる。

ＳＡ１柱列は遺構の確認にとどめたため、年代の検討が可能な遺物が出土していない。重複関係ではＳＤ11溝跡に切られており、近世よりは遡ると考えられる。

⑶　ＳＩ３竪穴遺構出土の遺物について

①遺物の特徴と年代について

ＳＩ３竪穴遺構からは年代の検討が可能な遺物が出土している。そのうち土器は14個体である。土器の特徴をいくつかにまとめてみる。

内面ヘラミガキ・黒色処理された土師器Ｄ－17坏は、製作にロクロを使用しており、切り離し技法は回転糸切り無調整である。器形は体部下半がわずかにふくらみ、内弯ぎみに外傾している。

赤焼き土器には坏、高台付皿、高台付坏がみられる。製作にロクロを使用し、切り離し技法は回転糸切り技法によるもので再調整はみられない。坏の器形には、体部から口縁部にかけて直線的に外傾するもの（Ｄ－16)、口縁部で外反するもの（Ｄ－４)、体部下半でわずかにふく

らみ、口縁部がわずかに外反するもの（D－2・5・14)、わずかに丸みを帯びながら外傾するもの（D－15）がみられる。高台付皿D－1の器形は、体部がほぼ円盤状に近く直線的に外傾し、口縁部でやや外反している。坏部の底部に高台が付けられ、四辺形状で平坦面が接地する。高台付坏D－8は体部から口縁部にかけて直線的に外傾し、坏部の底部に高台がつく。高台は四辺形状で平坦面が接地する。外面はロクロ目が顕著であるが内面では外面ほど観察されない。

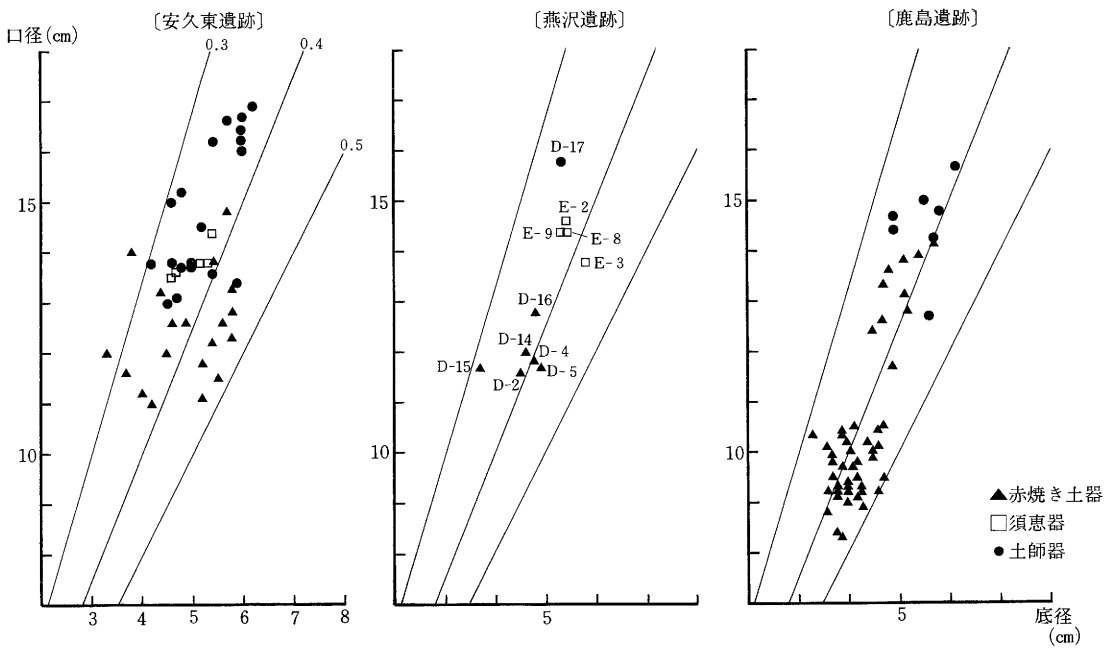
また須恵器には、図示できた5点のうち底部欠損のE－4を除き、手持ちヘラケズリ調整のため切り離し技法の不明なもの(E－2)、回転糸切りののち手持ちヘラケズリ調整があるもの（E－3)、回転糸切り技法で再調整のないもの（E－8・9）がみられる。器形は体部下半でふくらみ、内弯ぎみに外傾するもの(E－3)、体部中央部がややふくらみ、口縁部がわずかに外反するもの（E－2・8・9）がみられる。

瓦では、G－11均整唐草文軒平瓦が出土している。瓦当面にはきわめて流麗な文様が施され、顎面にはヘラ状工具で描かれた波紋をもつ。また顎面には縄叩きの痕跡が観察され、調整は施されていないものである。

次にこれらの遺物の実年代について考えてみたい。その際、まず土師器を中心として、共伴する土器の特徴や土器群の組成の面から検討する。次に比較的出土量の多い赤焼き土器の面から検討を加えることとしたい。

ロクロ使用の土師器坏は、東北地方南部における土師器編年の表杉ノ入式期に比定されており(註26)、10世紀代を中心とした表杉ノ入式期に関しては、安久東遺跡第2号住居→鹿島遺跡第1・4号土坑（B群土器）という変遷がとられている。実年代は安久東遺跡第2号住居出土土器群に10世紀前半、鹿島遺跡B群土器に10世紀後葉の年代が与えられている（註27)。

第30図によると、SI3竪穴遺構出土土器群の口径と底径の比は、0.3～0.5の間に分布している。具体的な数値では、土師器が0.36、須恵器が0.37～0.42、赤焼き土器が0.32～0.42である。また、口径が11～13cmの範囲に赤焼き土器が、13～15cmの範囲に須恵器が、15cm以上の範囲に土師器がまとまる傾向がある。このような土器群の傾向は、坏は口径16～17cmの範囲に土師器が、口径13～14cmの範囲に土師器・須恵器・赤焼き土器が、口径11～13cmの範囲に赤焼き土器がまとまりを持つとみられる安久東遺跡第2号住居跡出土土器群の様相に類似している（註28)。鹿島遺跡B群土器の分布は、赤焼き土器に大小のまとまりがみられ、中でも口径が10cmほどの赤焼き土器小皿が多くみられるようになる。SI3の中には、安久東遺跡ではみられない赤焼き土器高台付坏や高台付皿が含まれるが、鹿島遺跡にみられるような赤焼き土器小皿を含まない。第31図の土器群の組成をみても、安久東遺跡では赤焼き土器の比率が土師器よりも下回っているが(註29)、本遺跡では赤焼き土器の占める割合が高まっている。鹿島遺跡に至っては、赤焼き土器の占める割合が大幅に増加しており、須恵器がみられなくなる。これらのこ



第30図　坏類の口径と底径

とからＳＩ３竪穴遺構出土土器群は、安久東遺跡第２号住居跡出土土器群よりやや新しく、鹿島遺跡Ｂ群土器群よりは古い段階に位置付けられる。

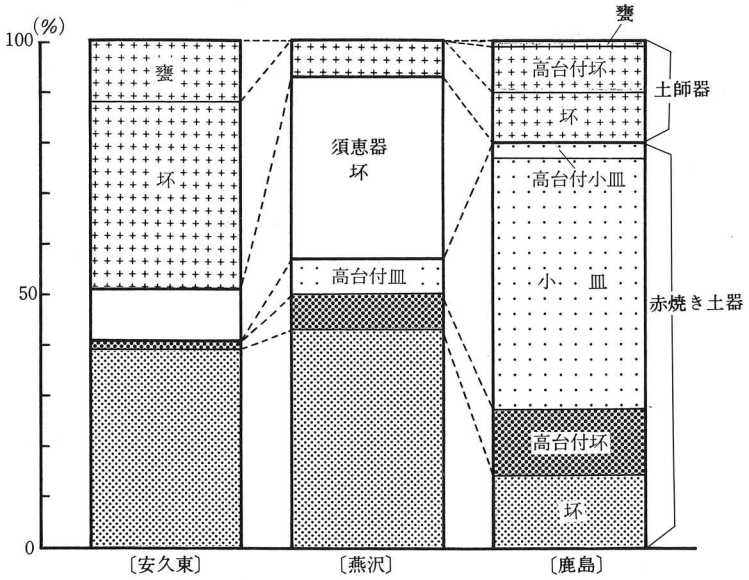
さらに、赤焼き土器の器種構成から検討を加えたい。赤焼き土器については、多賀城跡出土土器群の中の須恵系土器の範疇に含まれることは前述のとおりである。須恵系土器は、多賀城跡出土土器群のＥ群土器およびＦ群土器にみられる。Ｆ群土器に位置付けられるものとして、多賀城跡第61次調査「鴻ノ池地区」第７層出土土器群がある。この土器群の年代は10世紀中頃に比定され、須恵系土器で口径10cm前後の小型坏・高台皿が含まれる。本遺跡ＳＩ３出土の赤焼き土器には小型坏が含まれない。よってＳＩ３出土の赤焼き土器群は、大きくはＥ群土器に位置付けられる。Ｅ群土器の年代は10世紀前半に比定されている。さらにＳＩ３の赤焼き土器群の中には、高台付坏が含まれている。多賀城跡において、このような須恵系土器の高台坏がみられるようになるのは、灰白色火山灰の降灰後であるという(註30)。よって、ＳＩ３竪穴遺構出土の赤焼き土器群の年代は、10世紀前半でも灰白色火山灰の降灰後の時期とみておきたい。これは先に、土師器を中心として土器の形態や組成からみた結果と同様である。

また均整唐草文軒平瓦Ｇ－11は、多賀城跡出土軒平瓦721Ｂ番と同様の瓦である（註31)。この瓦については多賀城第Ⅳ期のものであり、９世紀後半以降の遺物と考えられる。

これらのことから、ＳＩ３竪穴遺構の年代についても10世紀前半を中心とした時期とし、こ

れらの遺物はその出土状況から廃棄されたものと考えられる。

また出土した土器の中には、内面や外面にススが付着しているもの（D－2、5、15、16）や口縁部の一部のみが焦げているもの（E－3、8）、再加熱を受けているもの（D－1、5、14）、赤色顔料とみられるものが付着しているもの（D－8、15）が観察される。内外面にススが付着したものについては、仏教行事に関連した灯明皿としての使用も想定される。(註32)



第31図 出土土器の種別と器種構成

②遺物に関する若干の問題点について

これまで遺物の時期と使われ方について検討してきたが、若干の問題点について述べてみたい。今回、須恵器として扱ってきた土器は、一般的な須恵器のように青灰色のものではない。本遺跡出土のものは灰白色を呈し、軽く（註33）やや軟質な印象を受けるものである。このような灰白色の土器は、安久東遺跡や三神峯地区原子核理学研究施設地点（註34）でも出土している。また本遺跡周辺の鴻ノ巣遺跡からも出土しており、この中で「これらの灰白色の土器が時期的に限定され、器種や器形、法量などに須恵器と違ったまとまりがみられるのであれば、須恵器から分離してとらえた方がより適切であると思われる。」ことが指摘されている（註35）

このような観点にたって遺物を詳細にみていくと、いくつかの特徴が認められる。

第1に、底部切り離しの後、手持ちヘラケズリ調整されるものが存在する（E－2、3）ことである。須恵器坏において、底部切り離しの後再調整されたものが出土している例としては、仙台市安養寺中囲窯跡（註36）がある。この窯跡は須恵器と共に、多賀城跡第Ⅳ期の瓦を生産した窯跡として知られている。よって9世紀後半でも869年を上限とする年代が考えられている（註37）。また、8世紀後半から10世紀中葉頃まで継続的に須恵器が生産されていた「須江窯跡群　関ノ入遺跡」（註38）では、9世紀第1四半期～第2四半期を中心としたSEK12窯段階において、底部切り離し技法が回転糸切り無調整になり、それ以降で再調整されるものはみられ

なくなっている。

第2に、内面の器面調整において何種類かの技法的な違いがみられることである。

A：ロクロ目の凹凸がみられず滑らかなもの（E－5）

B：全体的には滑らかであるが、手持ちのナデ状の痕跡が認められるもの（E－9）

C：ロクロナデ調整と手持ちのナデ状の痕跡が認められるもの（E－2）

D：うず巻き状のロクロナデ調整が認められるもの（E－4・8・3）

これらのうち、Aと同様の特徴はSI3出土の赤焼き土器にもあてはまるものがあり、D－2・5・15がこれにあたる。しかし検討できる遺物の量が限られているため、内面調整をひとつの特徴的なまとまりとして捉えることはできない。ここでは、このような内面調整が観察されることを指摘するにとどめたい。

第3に、土器の口縁部や体部の内外面に、黒斑のように黒くなっている部分が認められることである。これは再加熱を受けた痕跡や、油煙状に付着したススの痕跡とは異なっており、ここで須恵器として扱ったもの全てに認められる。

今回の調査で出土した資料のみでは、これらの灰白色の土器について十分に検討するまでには至らなかった。よってこれまでの報告にしたがい須恵器として扱った。さらなる類例の増加を待って検討されるべきであろう。

⑷ 第8次調査の成果から

今回発見した遺構の中でSB2掘立柱建物跡とSD7溝跡は、出土遺物の検討から10世紀の前半代に存在していた可能性が考えられた。とくに寺院の僧房とみられるSB2掘立柱建物跡の北桁行とSD7溝跡の南端は、15m（50尺）離れて平行している。遺構の方位も真北（真東西）から4°偏するという点で一致している。したがって建物と溝は同時期に存在していた可能性が高い。SD7溝跡の北では急な斜面に地形が変化すること（註39）から、丘陵上の平坦面の北限に位置して、主要な建物群を区画していたと考えられる。僧房の南方には、金堂や講堂のような寺院の主要な建物跡があると推定される。しかし丘陵上の平坦面の広さから、多賀城廃寺と同規模の伽藍配置は考えがたい。どのような建物によって寺院の中枢部が構成されていたのかは現時点では不明である。

また今回の調査では、かなりまとまった量の瓦が出土している。これまでの調査によって出土した瓦も含めれば、瓦葺きの建物が建っていた可能性が考えられる。しかし僧房とした建物跡の柱の抜き取り穴から出土した瓦は、小破片で量も少ない。よって僧房が瓦葺き建物とはみなし難いことから、周辺に瓦葺きの建物が建っていたことが考えられよう。

また出土した瓦の中には7世紀末から8世紀初めの瓦も含まれており、この時期にも瓦葺き建物が建っていたことも想起されよう。しかしその時期の瓦葺き建物が寺院として機能してい

たものかどうかは明らかではない。以上のように検討されなければならない点が残されているが、それらについては新たな調査成果の蓄積を待って検討していきたい。

（註）

註１　仙台市文化財調査報告書第44集「宮城県仙台市鴻ノ巣遺跡」1982

註２　多賀城市文化財調査報告書第23集「新田遺跡（第４・11次調査）」1990

註３　多賀城市史　第４巻　考古資料「山王遺跡」1991

註４　仙台市文化財調査報告書第62集「燕沢遺跡」1984（第２次調査）

註５　仙台市文化財調査報告書第148集「鴻ノ巣遺跡（第６次調査）」1991

註６　渡辺泰伸「多賀城創建期以前の瓦生産とその供給地の様相－仙台市大蓮寺瓦窯跡を中心として－」『東北学院大学東北文化研究所紀要　第14号』1983

註７　仙台市文化財調査報告書第３集「仙台市燕沢善応寺横穴古墳群」1968

註８　内藤政恒　「仙台市台ノ原・小田原瓦窯址群と出土の古瓦（Ⅰ）～(Ⅳ)」『歴史考古』９～13号　1963～65

註９　宮城県文化財調査報告書第138集「山王遺跡－仙塩道路建設関係遺跡八幡地区調査概報－」1990

註10　仙台市文化財調査報告書第50集「岩切畑中遺跡」1983

註11　註４に同じ

註12　多賀城市文化財調査報告書「高崎・市川橋遺跡調査報告書」1982

註13　神　英雄「仙台平野の条里遺構－条里制施行地域の北限をめぐって－」『龍谷大学院紀要　第３集』1981

註14　第３回　東日本埋蔵文化財研究会資料「古代官衙の終末をめぐる諸問題」－第Ⅰ分冊問題提起・各地域の概要－　1994

註15　大石直正「６　宮城野とみやこ」、羽下徳彦「７　奥州合戦」『仙台の歴史』宝文堂出版株式会社　1989

註16　註４に同じ

註17　仙台市文化財調査報告書第39集「燕沢遺跡」1982（第１次調査）

註18　註４の中では、漆紙文書の出土から官衙の可能性も指摘されているが、その後の調査を含めても遺構からは官衙と断定されるものは発見されていない。

註19　宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡」政庁跡本文編　1982

註20　仙台市文化財調査報告書第116集「燕沢遺跡」1988（第３次調査）

註21　工藤雅樹「陸奥国分寺出土の宝相華文鐙瓦の製作年代について－東北地方における新羅系古瓦の出現－」『歴史考古』第13号　日本歴史考古学会　1965

註22　宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所「多賀城跡」政庁跡　本文編　1982-3

註23　井上喜久男『尾張陶磁』　ニューサイエンス社　1992

井上氏の古代の須恵器・瓷器編年によれば黒笹14号窯式の年代観は、消費遺跡の出土資料の年代観を検討した上で、９世紀前半期～中頃の時期に比定している。

註24　Ｆ－９重弁蓮華文軒丸瓦は、出土した瓦の蓮弁は素弁状となっており、中に小蓮弁は観察されない。しかし東北大学所蔵の燕沢遺跡出土の瓦（東北大学文学部考古学資料図録Ｋ116重弁蓮華文軒丸瓦）と比較すると、東北大学所蔵の瓦も小蓮弁が観察されない箇所があり、蓮弁の幅、間弁の形態の特徴から同種の瓦と判断した。

註25　鑑定は本課調査係佐藤洋が行い、生産窯や年代などについて教示を受けた。

註26　氏家和典「東北土師器の形式分類とその編年」『歴史』第14号

註27　仙台市文化財調査報告書第99集「五本松窯跡」1987

註28　土岐山武「安久東遺跡」『東北新幹線遺跡調査報告書－Ⅳ－』宮城県文化財調査報告書第72集　1980

註29　現報文によれば出土土器は土師器の他に、須恵器坏５点、赤焼き土器坏20点などがあり赤焼き土器が主体となっている。ただし後に佐々木（1984：「鹿島遺跡・竹ノ内遺跡」）において、須恵器５点中には赤焼き土器坏も一部含まれているとの指摘がなされている。しかし今回の比較においては、現報文に従って分類を行っている。

註30　柳澤和明「多賀城周辺における10世紀前後の土器群」第１回　岩手県古代末土器の勉強会資料　1995
また、多賀城跡出土の須恵系土器や本遺跡出土の赤焼き土器について柳澤和明氏より御教示を頂いた。記して感謝の意を表したい。

註31　Ｇ－11均整唐草文軒平瓦については、多賀城跡調査研究所所長　進藤秋輝氏より、多賀城跡出土の軒平瓦721Ｂと同一のものであることを指摘して頂いた。軒平瓦721Ｂの年代は、多賀城跡第Ⅳ期の中でも貞観11年(869)を上限とし、これにごく近い時期と考えられている。そのほかにも数々の示唆に富む御教示を頂いた。記して感謝の意を表したい。

註32　多賀城市史　第４巻　考古資料　P151
多賀城市山王遺跡東町裏地区SK16土坑から土器内面に油煙の付着した墨書土器が出土し、仏教行事である万燈会を想定している。

註33　それぞれの土器の重量は次のとおりである。
Ｅ－２（130g）、Ｅ－３（120g）、Ｅ－５（100g）、Ｅ－８（140g）、Ｅ－９（150g）

註34　大場拓俊「ａ．土師器　ｂ．須恵器　ｃ．須恵器系土器」『東北大学埋蔵文化財調査年報３』1990
この中で大場氏は須恵器として報告しながらも、「色調は灰白色を呈し、焼きまあまいものが多い。」と述べている。

註35　註５に同じ。

註36　古窯跡研究会「陸奥国官窯跡群－台の原古窯跡調査研究報告－」『研究報告』第２冊　1973

註37　安養寺中囲窯跡、五本松窯跡、堤町窯跡出土の須恵器については、仙台市文化財調査報告書第99集「五本松窯跡」1987の中で、小川淳一氏により詳細な検討が行われている。

註38　河南町教育委員会　河南町文化財調査報告書第７集「須江窯跡群　関ノ入遺跡」1993

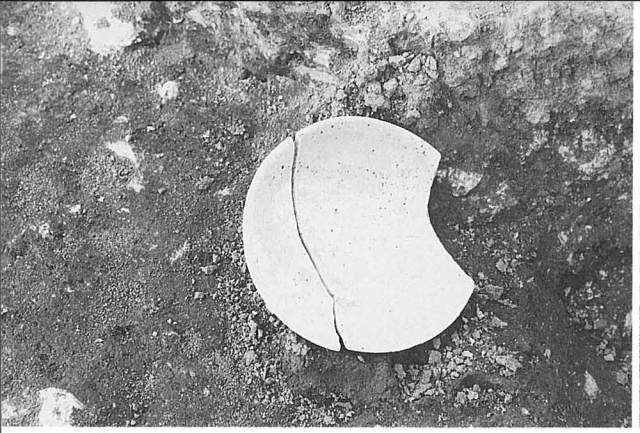
註39　国道４号線仙台バイパスによって、遺跡の北側は削平されている。しかし、昭和36年撮影の航空写真によれば、バイパス工事のされる以前から鞍部となっていることが観察される。

なお、この他に以下の方々から貴重な御助言を頂いた。記して謝したい。
奈良国立文化研究所　小林謙一、巽淳一郎、宮城県多賀城跡調査研究所　丹羽茂、東北大学文学部考古学研究室。

図版 1
調査区遠景
（平成 6 年撮影）

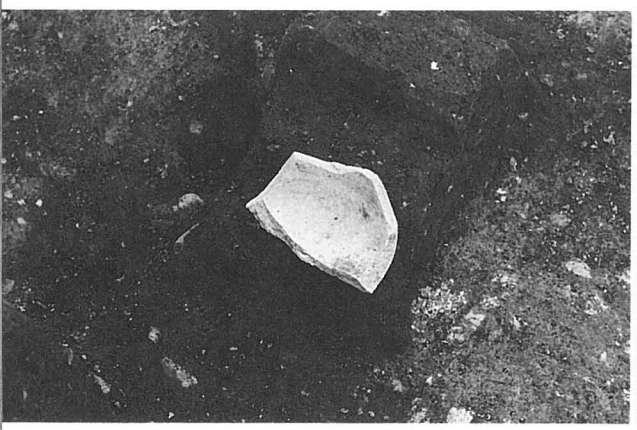
図版 2
ＳＢ 2 掘立柱建物跡
全景（南より）

図版 3
ＳＢ 2 Ｎ 2 Ｗ 7
遺物出土状況
（南より）



図版４　ＳＢ２Ｎ２Ｗ７遺物出土状況（Ｄ－13)

図版５　ＳＤ７溝跡遺物出土状況（Ｆ－９）



図版６　ＳＤ７溝跡遺物出土状況（Ｅ－７）

図版７　ＳＤ９溝跡遺物出土状況（Ｆ－８）

図版８　Ｂ区北半部全景（東より）

図版９　ＳＤ７溝跡遺物出土状況（東より）

図版10　ＳＩ３竪穴遺構遺物出土状況（北より）

図版11　ＳＩ３竪穴遺構遺物出土状況
（Ｄ－14）

図版12　ＳＩ３竪穴遺構遺物出土状況
（Ｄ－17）

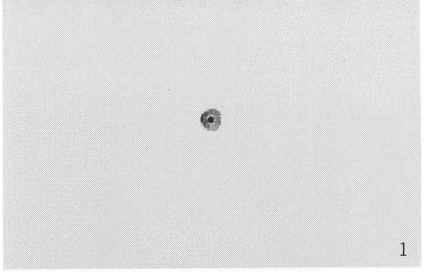
図版13
ＳＤ８溝跡
遺物出土状況
（Ｅ－５）

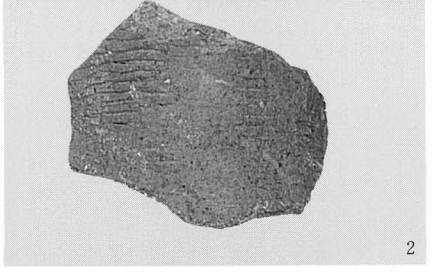
図版14　ＳＩ３竪穴遺構遺物出土状況
（Ｅ－２、Ｅ－８、Ｄ－15）

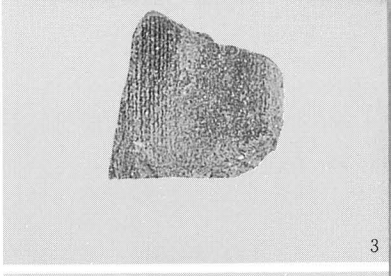
図版15　ＳＩ３竪穴遺構遺物出土状況
（Ｎ－１）

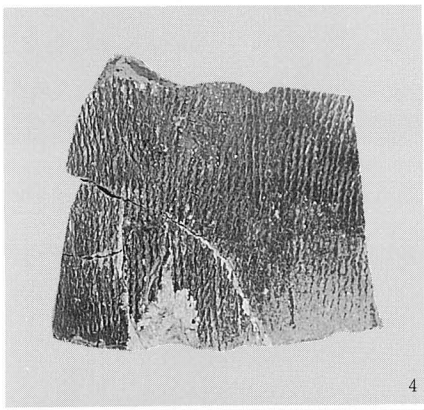
図版16
ＳＩ３竪穴遺構
遺物出土状況
（Ｇ－11）

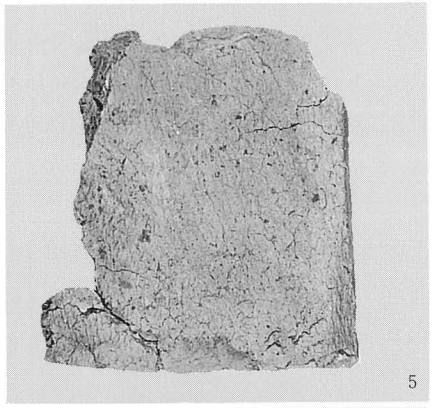
図版17
ＳＡ１柱列全景
（南より）

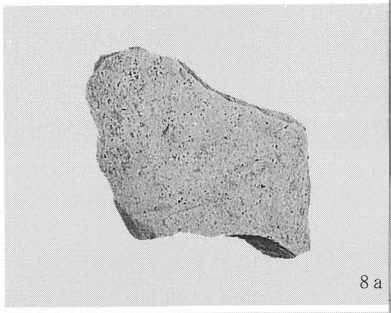


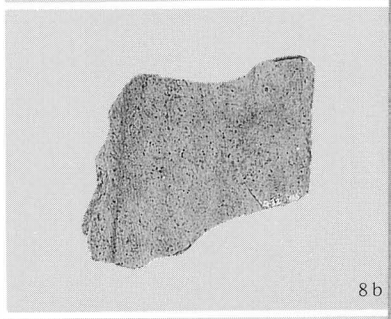


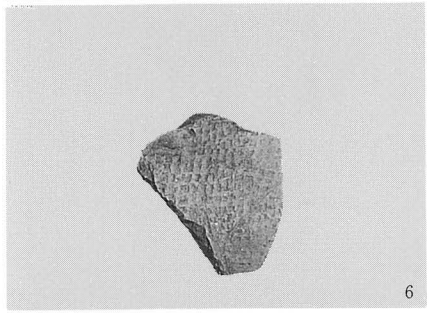


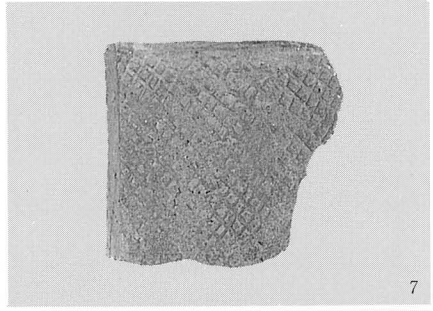


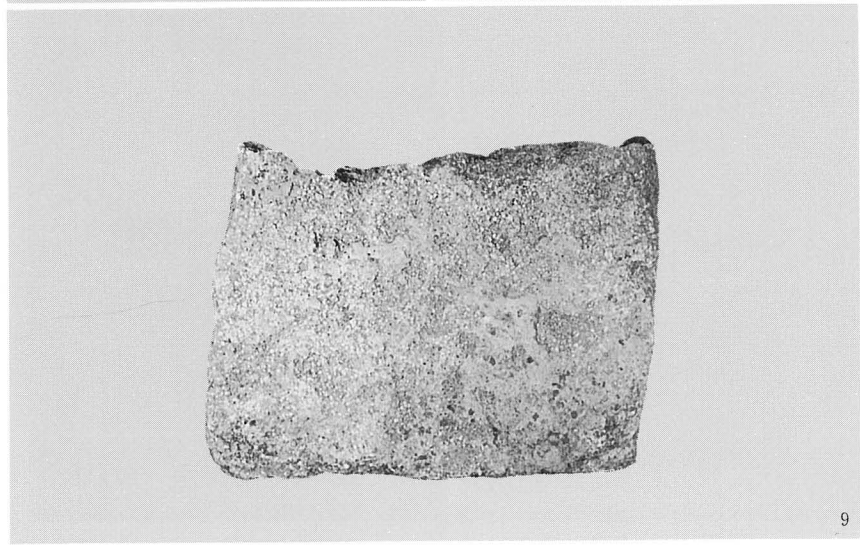


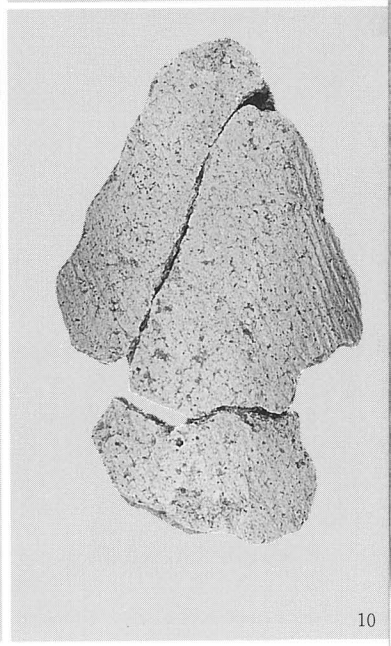






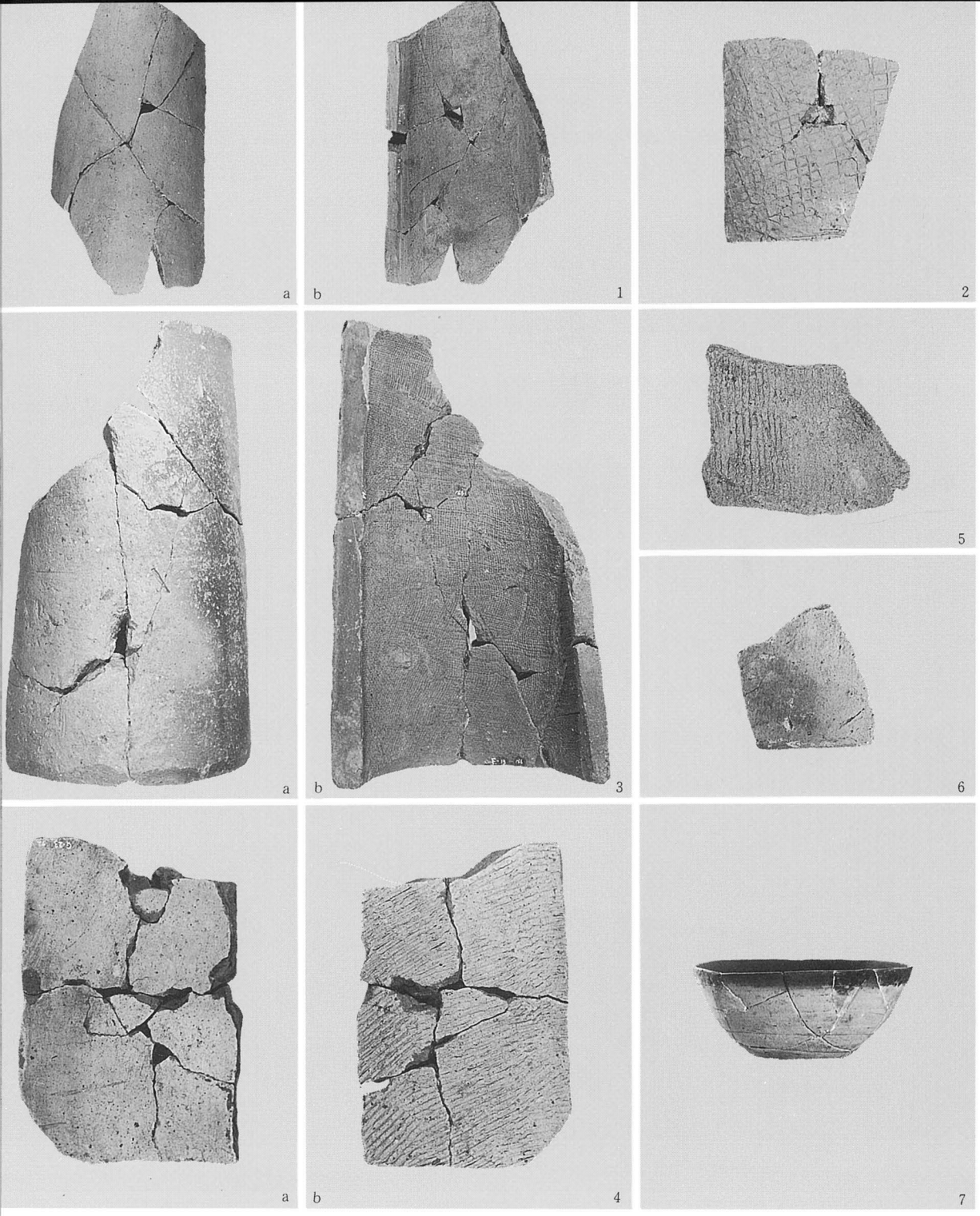






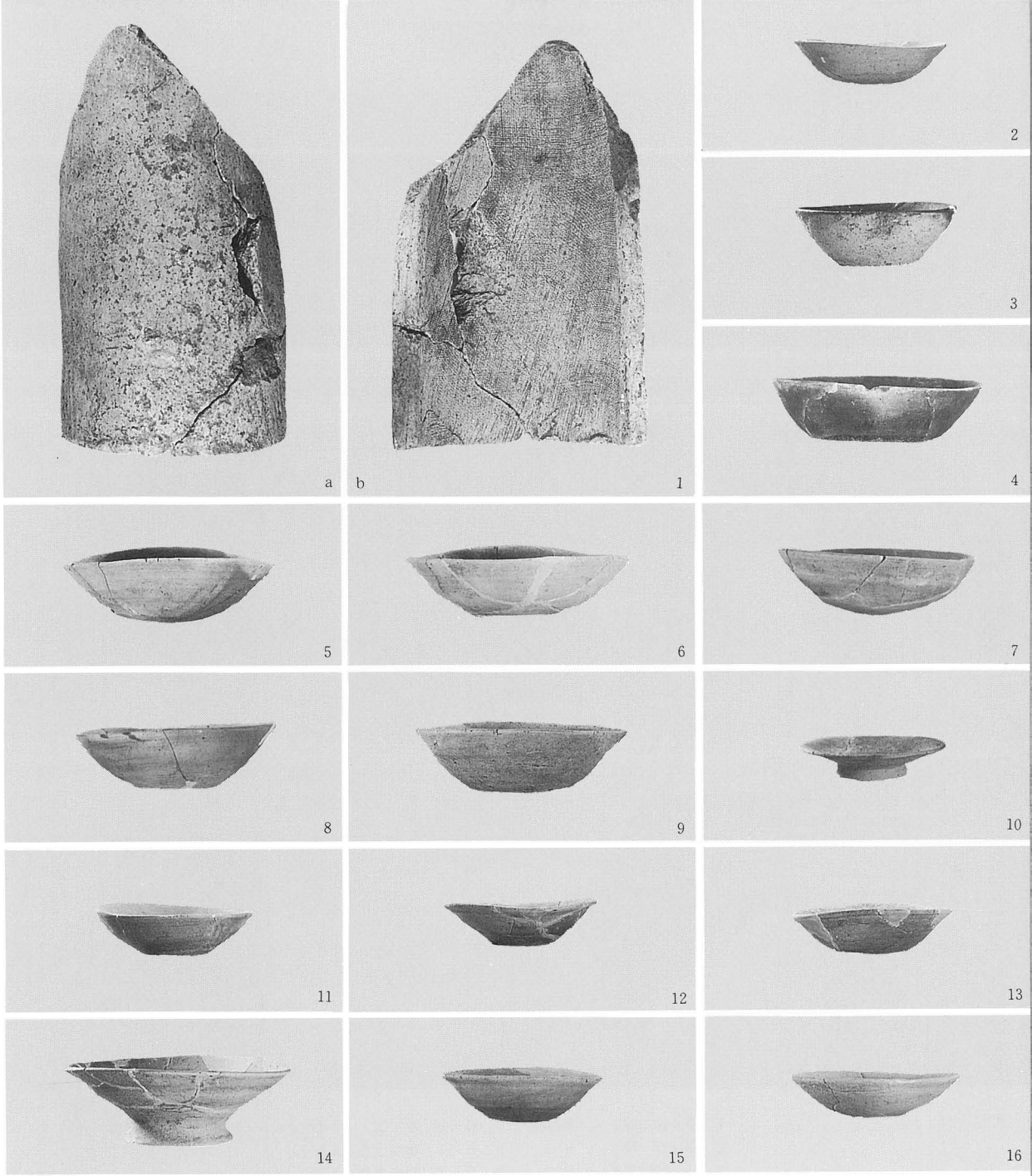
1．K—19　玉　SB2　N1W2掘り方
2．F—15　丸瓦　SB2　N1W4掘り方
3．G—20　平瓦　SB2　N5W7掘り方
4．G—16　平瓦　SB2　N2W6掘り方　N5W6掘り方
5．G—21　平瓦　SB2　N2W6掘り方
6．G—20　平瓦　SB2　N5W7掘り方
7．G—26　平瓦　SB2　N4W6掘り方
8．G—32　平瓦　SB2　N5W4抜き取り
9．K—3　切石　SB2　N2W1掘り方
10．F—16　丸瓦　SB2　N5W4抜き取り

図版18　出土遺物（1）



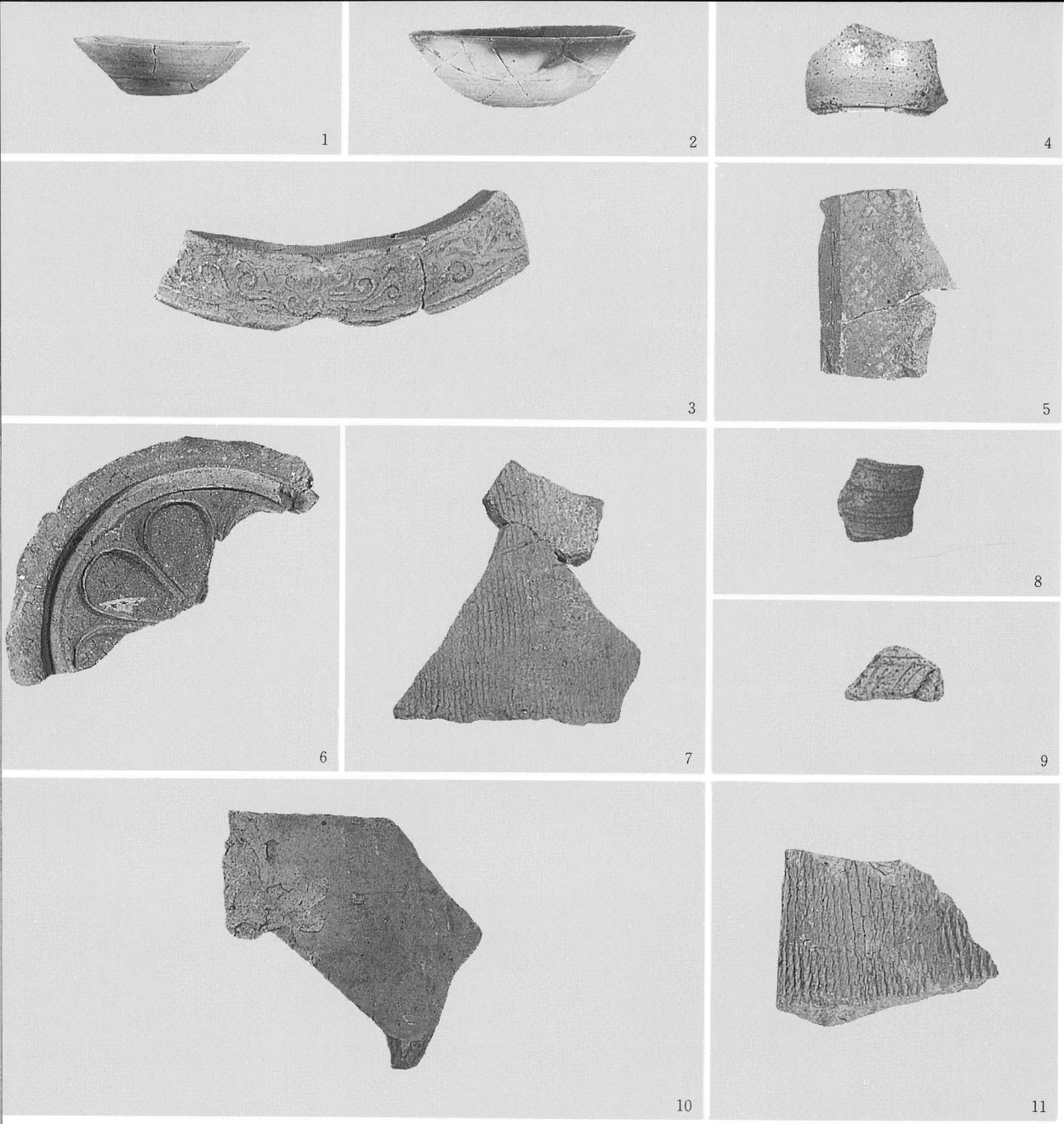
1．F—12　丸瓦　SB2　N5W4抜き取り
2．G—29　平瓦　SB2　N5W4抜き取り
3．F—13　丸瓦　SB2　N5W4抜き取り
4．G—23　平瓦　SB2　N5W4抜き取り
5．G—22　平瓦　A区　表土
6．G—19　平瓦　A区　表土
7．D—11　坏　A区　表土

図版19　出土遺物（2）



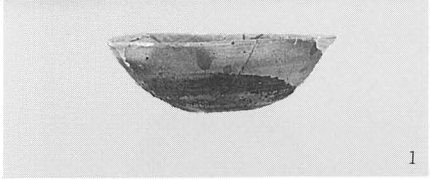
1．F—10　丸瓦　SI 2
2．D—13　坏　SB 2
3．D—9　坏　SI 2
4．E—6　坏　SI 2
5．E—2　坏　SI 3
6．E—3　坏　SI 3
7．E—4　坏　SI 3
8．E—8　坏　SI 3
9．E—9　坏　SI 3
10．D—1　高台付坏　SI 3
11．D—2　坏　SI 3
12．D—4　坏　SI 3
13．D—5　坏　SI 3
14．D—8　高台付坏　SI 3
15．D—14　坏　SI 3
16．D—15　坏　SI 3

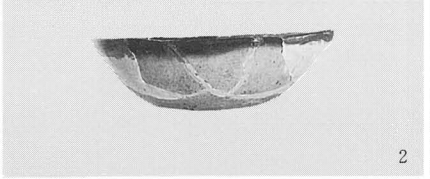
図版20　出土遺物（3）

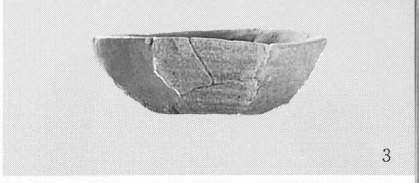


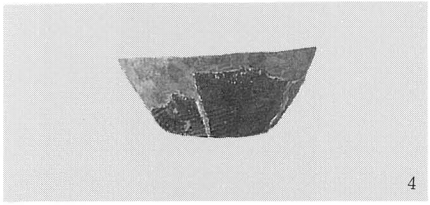
1．D—16　坏　　SI 3　　7．G—14　平　瓦　　SD 7
2．D—17　坏　　SI 3　　8．B—1　弥生土器　SD 7
3．G—11　平瓦　　SI 3　　9．B—2　弥生土器　SD 7
4．E—7　壺　　SD 7　　10．G—13　平　瓦　　SD 7
5．G—27　平瓦　　SD 7　　11．G—17　平　瓦　　SD 7
6．F—9　軒丸瓦　SD 7

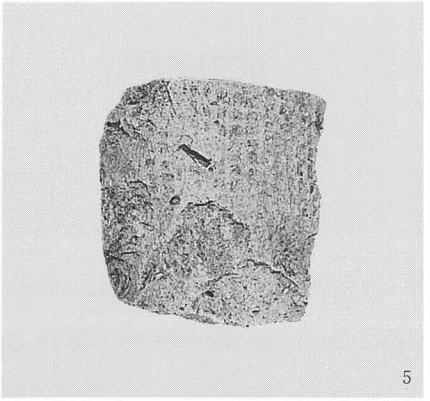
図版21　出土遺物（4）

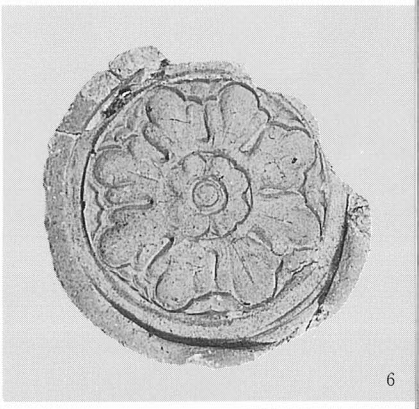


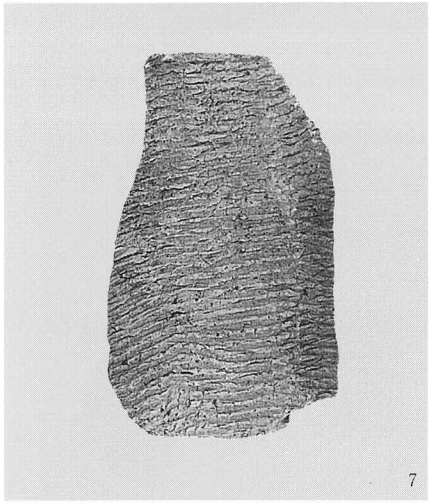


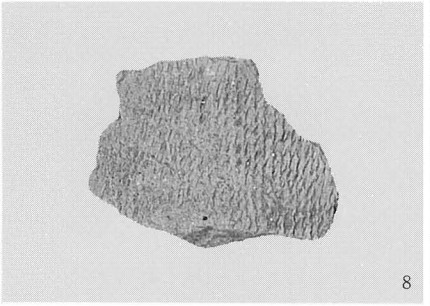


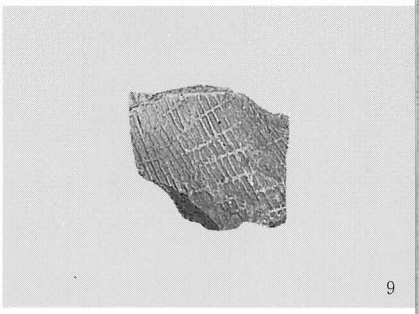


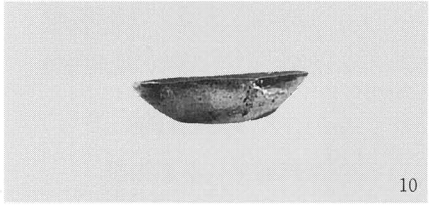


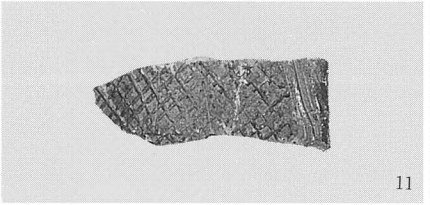


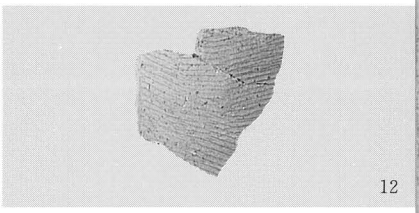


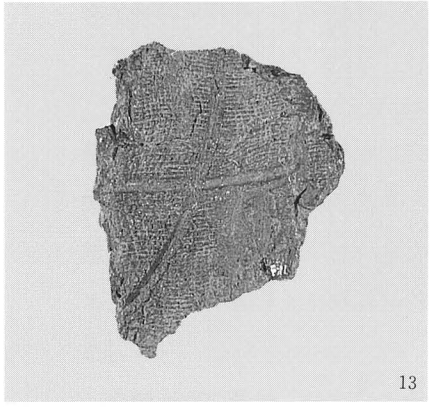


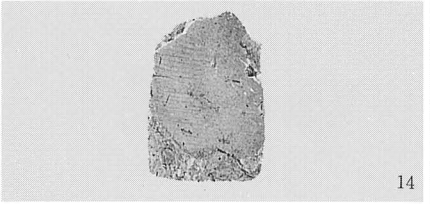


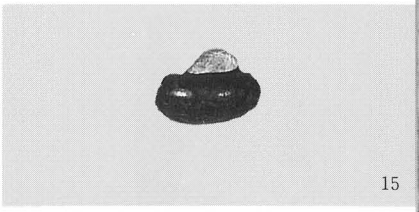








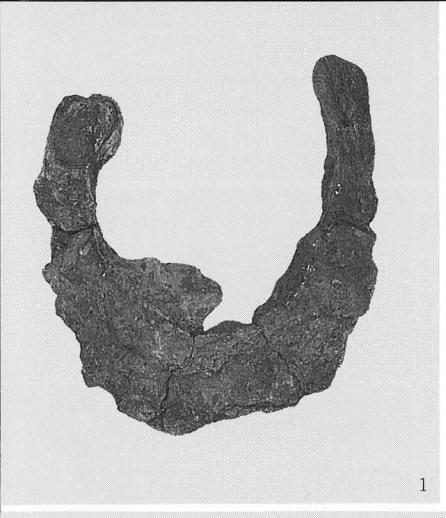




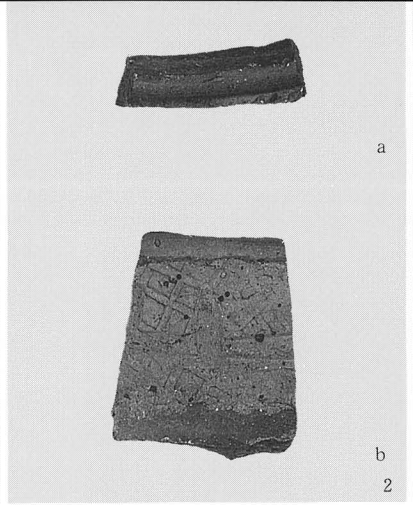
1．E—5　坏　SD８
2．D—10　坏　SD８
3．D—12　坏　SD８
4．C—８　甕　SD８
5．F—17　丸瓦　ＳＤ８
6．F—８　軒丸瓦　SD９

7．F—14　丸瓦　P17
8．G—18　平瓦　SD10
9．G—31　平瓦　B区遺構検出面
10．D—３　坏　B区表土
11．G—28　平瓦　B区遺構検出面
12．G—24　平瓦　B区表土
13．F—11　丸瓦　遺構検出面
14．G—25　平瓦　B区遺構検出面
15．I—２　秉燭　SD11

図版22　出土遺物（5）



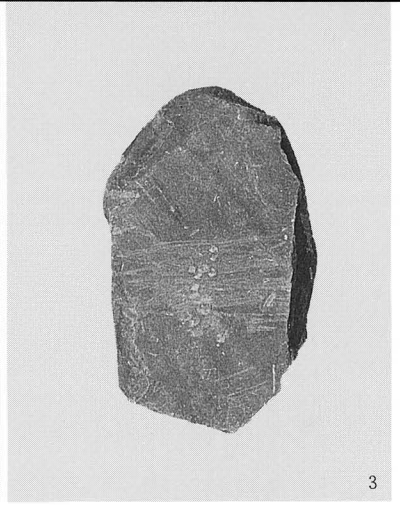
1



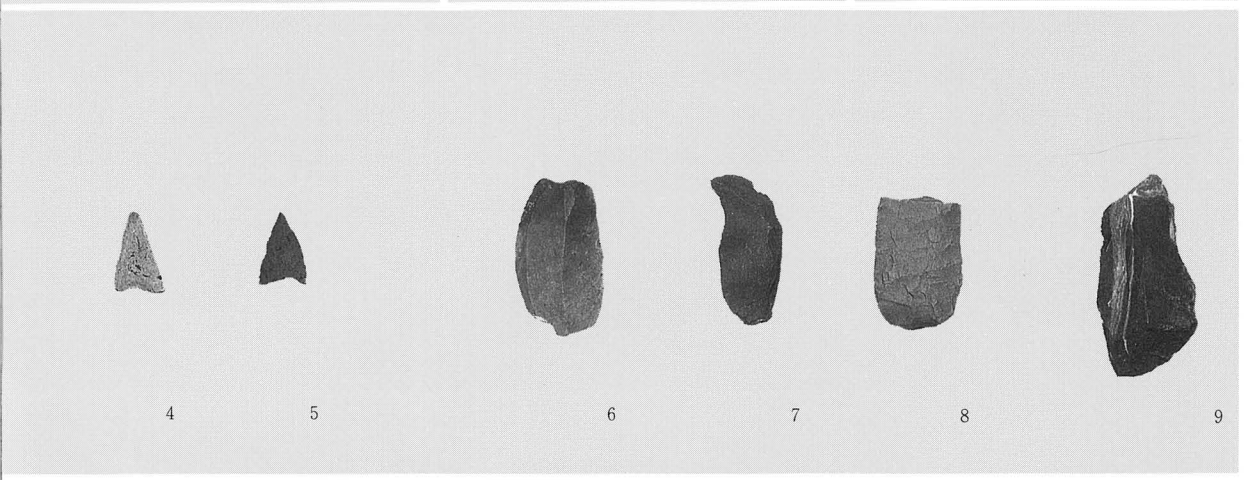
a

b

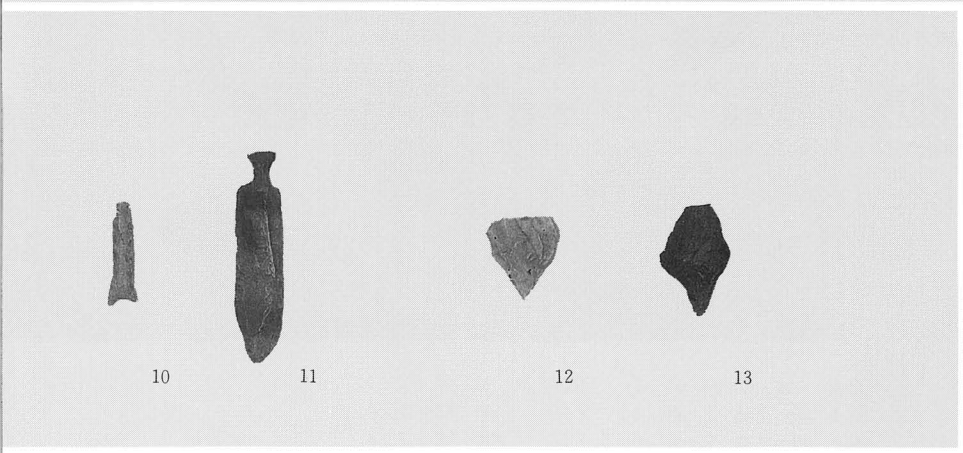
2



3



4 5 6 7 8 9



10 11 12 13

1．N－1　鋤　先　ＳＩ３
2．G－12　軒丸瓦　ＳＤ８
3．K－11　砥　石　ＳＤ８
4．K－4　石　鏃　ＳＤ７
5．K－8　石　鏃　ＳＤ７
6．K－6　剝　片　ＳＤ７
7．K－5　剝　片　ＳＤ７
8．K－7　剝　片　ＳＤ７
9．K－17　石　器　ＳＢ２　Ｎ３Ｗ４掘り方
10．K－10　石　鏃　ＳＤ８
11．K－9　石　匙　ＳＤ８
12．K－18　石　錐　ＳＢ２　Ｎ３Ｗ４掘り方
13．K－16　石　錐　Ａ区表土

図版23　出土遺物（６）

［2］ 郡山遺跡

1．位置と環境

郡山遺跡は仙台市太白区郡山二丁目～六丁目に位置し、東西800m、南北900mの60万㎡に及ぶ遺跡である。遺跡の北から東にかけて広瀬川、南を名取川が流れ、西北は長町の市街地を介して標高100～200mの丘陵が迫り、西南は平野部が続いている。発掘調査は昭和55年から継続的に進められ、以下のことが明らかになってきている。新しい時期（II期官衙）と古い時期（I期官衙）の2時期の官衙が同地にあったこと。I期官衙は造営基準方向が真北から30～40°ふれており、材木列や溝跡により区画され内部には官舎や倉が集中していたこと。II期官衙は造営基準方向が真北方向を取り、四町（428m）四方の範囲で外郭に材木列と大溝をめぐらしていたこと。内部中央には四面廂付建物の他に、石敷や石組池などの稀な遺構があること。II期官衙南方には同一基準方向の寺が建っていたこと。寺とII期官衙の間には、四面廂付建物をはじめ大型の掘立柱建物群が存在すること。7世紀後半代から8世紀初めまでで、官衙の機能が終了することなどである。

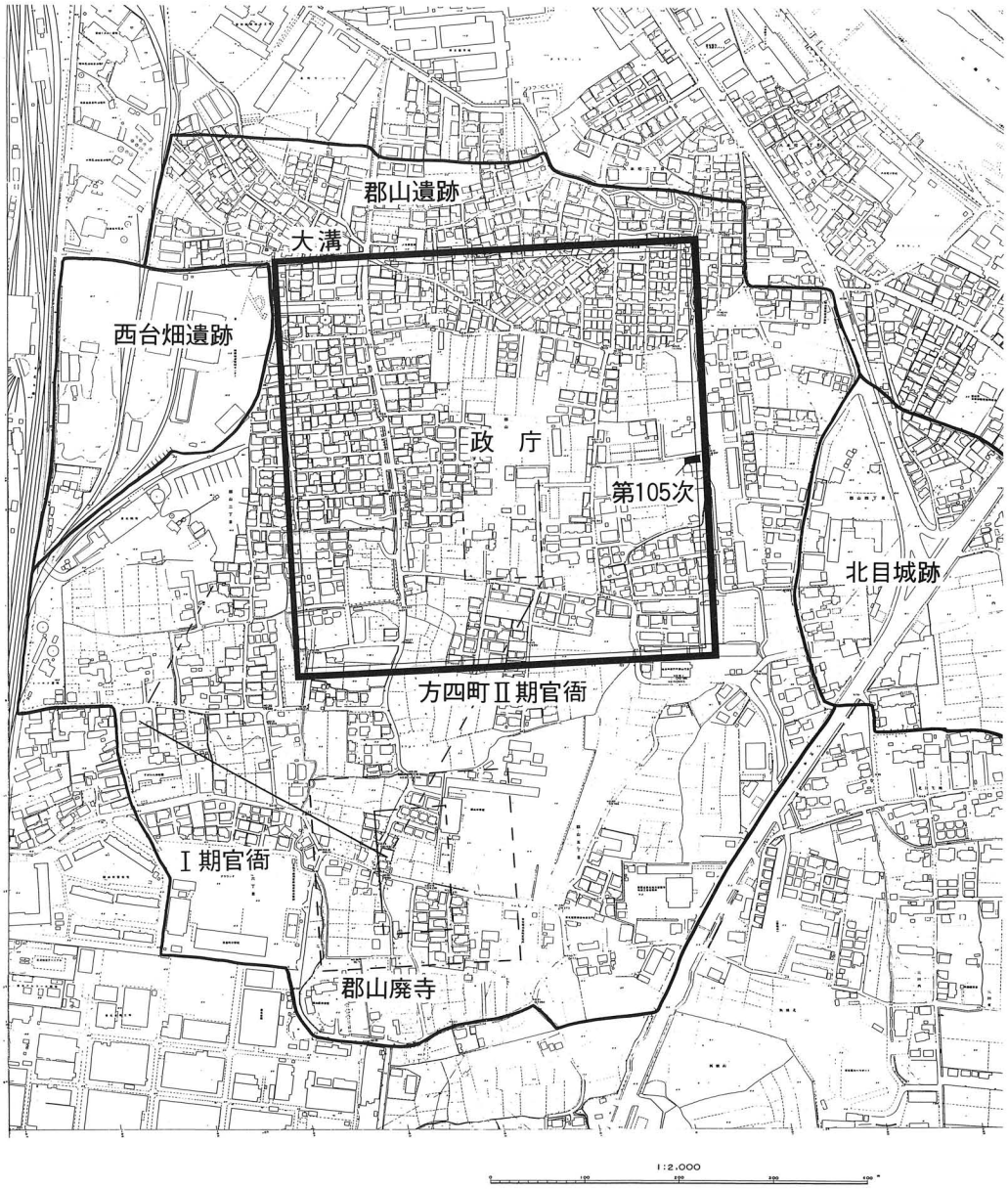
2．調査概要

郡山遺跡の発掘調査については、仙台市文化財調査報告書第194集「郡山遺跡XV－平成6年度発掘調査概報－」に詳細に記述し、本報告では概要を載せるにとどめる。

第105次調査

平成6年8月23日に太白区郡山3丁目24－15の庄子都代子氏より、郡山3丁目3－4に共同住宅新築に伴う発掘届が提出された。申請地はII期官衙の東辺材木列上で、東門の推定位置の南に隣接している。試掘調査により表土の厚さを確認し、遺構の検出面まで共同住宅の基礎が達しないように指導した。さらに当市教育委員会ではII期官衙東門ときわめて近接しているため、平成6年10月3日から10月31日にかけて4×10mの調査区を設定して発掘調査を実施した。

発掘調査の結果、材木列1条、竪穴遺構1基、土坑2基、溝跡3条などを検出した。材木列は推定された位置で発見され、II期官衙東辺の材木列と考えられる。なお東門に関連する遺構は発見されなかった。



第32図　郡山遺跡調査区位置図

報 告 書 抄 録

ふりがな	せんだいへいや　　いせきぐん
書名	仙台平野の遺跡群
巻次	XIV
シリーズ名	仙台市文化財調査報告書
シリーズ番号	第195集
編著者名	長島榮一、熊谷裕行
編集機関	仙台市教育委員会
所在地	〒980-71 宮城県仙台市青葉区国分町三丁目7-1 TEL022-214-8893～8894
発行年月日	1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 移籍番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
つばめさわいせき 燕沢遺跡	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 みやぎのくつばめさわひがし 宮城野区燕沢東三丁目他	04100	01001	38°17′10″	141°12′00″	19941104 ～19941227	400	重要遺跡の範囲確認調査
こおりやまいせき 郡山遺跡	みやぎけんせんだいし 宮城県仙台市 たいはくくこおりやま 太白区郡山三丁目他	04100	01003	38°13′13″	141°18′30″	19941003 ～19941031	40	共同住宅建築工事に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
燕沢遺跡	寺院跡	平安	掘立柱建物跡、溝跡	瓦、土師器、須恵器 石器、赤焼き土器	
郡山遺跡	官衙跡	古墳～奈良	材木列、溝跡、土坑	土師器片、須恵器片	

仙台市文化財調査報告書第195集

仙台平野の遺跡群XIV

平成7年3月

発行　仙台市教育委員会
仙台市青葉区国分町3－7－1

印刷　㈱東北プリント
仙台市青葉区立町24-24　TEL 263-1166